経済学者・早川三代治が小説『処女地』で描いた北海道虹別開墾村民の生活

――世界大恐慌の年に始まった凶作続きの村の「敗者」の物語――

金　城　ふみ子

東京国際大学論叢　人文・社会学研究　第1号　抜刷
2016年（平成28年）3月20日

経済学者・早川三代治が小説『処女地』で描いた北海道虹別開墾村民の生活

――世界大恐慌の年に始まった凶作続きの村の「敗者」の物語――

金　城　ふみ子

Economist Miyoji Hayakawa's Depiction of Hokkaido's Pioneer Farmers in His Novel *Shojo-chi* [Virgin Land]

KINJO, Fumiko

Abstract

Miyoji Hayakawa (1895–1962) was a Japanese economist and writer. He devoted his life as a mathematical economist and econometrician to research into income and wealth distribution with a focus on distribution of cultivated land holdings in Japan before and after the Land Reform in 1946. At the same time, he also wrote a series of novels, *Tsuchi to Hito*, comprised of five completed volumes. The second volume entitled, *Shojo-Chi* [virgin land] was first published in Japan during World War II. In this story, a young farmer and his family were lured to move to Hokkaido by a propaganda film screened by the immigration office of the Hokkaido Government. However, the reclaimed land given by the Hokkaido Government was a barren land of volcanic ash. After several years' struggle with cruel nature, he abandoned it, and miserably died during the Great Depression. This paper examined each stage of his downfall, and investigated what caused him to die alone in a winter field.

Keywords: Miyoji Hayakawa, pioneer farmer, inequality, reclaimed land, Hokkaido

目　次

1. 研究の背景
2. 研究の狙い
3. 作品の概要
4. 凶作続きの開墾村での農民の生活
5. 釧路原野の「おらの土地」での悲劇
6. 世界大恐慌下の釧路の町での低所得階層の生活
7. 結びに：敗者となった開墾移民の物語に潜む社会問題

1. 研究の背景

1.1　早川三代治の三つの顔

早川三代治（1895–1962）という，小樽の地主の長男に生まれ，家業を継ぎながらも経済学者として活躍し文学作品も書いた人物がいる。

家族は，入り婿の父両三，母志満，弟昇の四人家族であった。弟の昇はアイヌの研究者で，1970年に『アイヌの民俗』民俗民芸双書54を岩崎美術社から刊行している。早川の作品にアイヌのことが書かれているのは，単に北海道の出身者であるということだけではなく，身近にいる弟の影響もあるのかもしれない。弟のことは「敗戦前後」（未定稿）に，父のことは『若い地主』や「農地解放」（未刊行）に，母のことは「ある時期の謙介」（草稿）などに書いている。これらの作品では，親戚についても書かれている。

1931年に山木たけと結婚し，4人の息子を得ている。[1)] 小樽商科大学附属図書館所蔵の早川文庫は，三代治の死後，たけ夫人による寄贈で作られた。その寄贈受入れの経緯については，松田（1976）「早川三代治教授と早川文庫」小樽商科大学附属図書館『早川文庫目録』[2)] に詳しい。現在早川の四男佳郎によって，資料の追贈が行われている。

早川は，大正時代の人気作家の一人であり欧文脈[3)] の華麗な使い手と言われた有島武郎（1878–1923）と，日本自然主義の代表的作家の一人である島崎藤村（1872–1948）を，ともに師と呼んでいる（早川，1947g）。

この，経済学者，地主【農場経営者】，文学者という三つの顔を持つ早川は，19歳で有島に出会って師事した。大学卒業後にドイツに留学して戻り，母校北大の経済学の教員となる。しかし，母や弟の病を機に40歳で大学教員を辞め家業を継いで地主となったが，自身と同じく地主であった，師の有島が死ぬ前年に農場を無償解放したことや，トルストイの「地主の朝」の若い主人公の地主ネフリュドフと自分を重ねて考えることで，父親から受け継いだ「不耕作地主」であることに複雑な思いを抱くようになる。経済学者としては，土地【耕作地】所有の分布を調べ，資産分布の中の耕地保有分布の上層への偏りを実証的に示し，経済学者として得た知見や，地主としての考えや悩みを文学という形に結晶させていく。

1.2　有島武郎との関係

経済学者の早川が戯曲や小説なども書く文学者であったことは意外に知られていない（松田，1976；上久保，2003）。文学との出会いは，中学3年頃，英語の先生から「初めてホイットマンの大胆不覇な性格」を知り，翌年，母を通して知った高山樗牛の「ホイットマン批判とその詩」に

感激したことが早川治男・佳郎（2012b）「早川三代治　年譜」に書かれている。（以下，本稿では早川三代治に関する履歴事項などはすべてこの早川の長男と四男によって作成された年譜により，原則としていちいち引用注はつけない。必要に応じて付ける場合には，早川治男・佳郎（2012b, p. 9）を「年譜，p. 9」のように略記する。）

文学作品は，中学時代から書き始めている。中学校時代には，『小樽中学校校友会雑誌』に「THE CHRYSANTHEMUM」「愁の人と自由の鳥」「第五学年旅行記」を書いている。また，大学時代には，『北大文武会会報』に19歳で朝千吉というペンネームを使って，1914年に「盲目の王子」（73号），1915年には「サタンの目ざめ」（74号）の創作発表をしたり，小樽で新たに創刊される文芸雑誌『白夜』に同人として参加したりしている。

有島武郎との最初の出会いは，作品を通してであった。「有島武郎先生のこと」（未定稿）によると，早川が「有島武郎という名前を，私が初めて知つたのは，中学の四年頃だつたと思われる。それは『白樺』に載てゐた『ある女のグリンプス』の著者としてであつた。然しその人が札幌農科大学予科の英語の教授であると云ふことを知つたのは五年になって上級学校を何処[ママ]に撰ばうかと思案するやうになつてからであつた。」私【早川】は，中学校を卒業後の進路のために，神戸の高等商業，札幌農科大学予科，仙台の二高の三校の受験を考えていた。しかし，願書は出していたが，神戸は遠く「神戸まで学問に行くと云ふことは相当の決断を要することだつたので」，予科を受験した。しかし，「農業に関したことをやると云ふ考へを持たねばならないのだが，自分としてはまだそれほど考へがまとまつてゐた訳でもなかつた。その為であらうか。間際になつて予科の他に仙台の二高にも願書を出しておいた。」予科に合格して入学後，「学校が始まると，私の級の英語を受け持つ教授の一人が有島武郎先生であり，教室で『私が有島武郎です。』と自己紹介したその人は，入学試験の英語の書き取りをした試験官であつた。私は目をみはつて，その人の中に『ある女のグリンプス』の作者を見出そうとせずにはゐられなかつた。」と生身の有島との出会いについて書いている。（漢字は新字に直して引用。以下同様。）

有島との関係は，このように北海道帝国大学の前身の東北帝国大学札幌農科大学予科で出逢って師事し，有島が妻の療養のために札幌を去って後も，北海道帝国大学農学部農学科第一部を卒業3か月後の1921年6月に留学するまでの間，親しい師弟の付き合いがある。その関係は残された有島からの葉書などで知られている。有島が京都の同志社大学で行った特別講義に有島門下生で早川の生涯の友となった大島豊[4]（1891–1965）【同講義企画・運営者】など「有島ファン」とともに出席して，暇な時間に嵯峨野などを散歩したり，新劇公演の総通し稽古を見に行ったりしている。自宅にも遊びに行っている。欧州へ立つ前に有島に会いに行ったが先客があり待っていたが夜更けになっても帰らないので，辞去したが，客が帰った後でその旨が有島に伝えられると，「一言知らせてくれれば，先客を帰へしても会[ママ]んであったのに」と，有島が言ったと大島豊から聞いたと書かれている。（以上この段落，早川，1935bによる。）

また，早川が有島と親密な関係にあったことは，有島が妻安子の歌集『まつ虫』（非売品，限定私家本，発行400冊）を出したときに82番という比較的若い番号を贈られていることからも推察できる。表紙には，有島の自著と思われる墨筆で「呈 早川三代治82/400」，と書かれている。同書は，小樽商科大学附属図書館早川文庫に2015年に遺族から追贈されたものの一つである。文学作品としての「まつ虫」については，本稿の狙いからは外れるので，これ以上は言及せず，片山（2013）・片山（2004）他に譲る。

有島が1922年に狩太農場を解放したのも，翌年の有島の死も，早川の欧州滞在中のことであった。早川は1922年3月に経済学上の師でもある大西猪之助が急逝し，両者の共通の師のディー

ツェル教授とともに悲嘆していたことが「年譜」に載っている（年譜，p. 466）。しかし，同年の狩太農場解放については記載がない。有島の自死については，ベルリン大学に転学した直後のことであったことになるが，その時は何も書いていない。原稿を依頼されたが，どうしても書く気になれなかったと書いている（早川，1935b）。

ちなみに，有島の死に関連した作品は，死後10年経った1932年になって，ようやく『北大文芸』有島武郎追悼号，第14冊に「出家」という作品を書いた。1935年には「有島先生のこと」という文章を書いているが未定稿で，発表していない。第二次世界大戦後の1946年には北大予科で講演「有島武郎と島崎藤村」を行った。1948年には『文芸復興』第3巻第2・3号に「作家と生活　―島崎藤村と有島武郎―」を，1953年には『北海タイムス』「小樽文学散歩」10月17日号に「有島先生と小樽の『草の葉』の会」を，1962年には講談社『有島武郎集』月報25に「有島先生」を書いている。

なお，藤村に出会うのは，帰国して3カ月後の1925年4月に北海道帝国大学農学部の講師になり，欧州での経験などを随筆に書いたり，理論経済学の研究や翻訳をしたりしていた時期である。この時期に書いた随筆や，留学中や帰朝後に発表あるいは執筆したものは，『ラインのほとり』（随筆集）に収録されている（早川治男・佳郎，2012a，p. 459）。また，家業の地主も行いながら戯曲「吹雪の底」なども書き，藤村に認められた。戯曲「吹雪の底」（後に「新しき縄」と改題）は，藤村から，築地劇場の創設者の一人である劇作家で演出家の小山内　薫（1881–1928）に紹介され，続いて，戯曲「聖女の肉体」が作家と実業活動を両立していた水上瀧太郎（1887–1940）に紹介される（年譜，pp. 467–468）。

1.3　学生時代

早川の育った当時の小樽は，樺太と内地との中継商業都市であると同時に国際的な港湾都市であった。人口は，小樽市の統計データによると，明治元年2,230（444世帯），三代治の生まれた翌年の1897年54,996（11,602），1899年61,893（8,909），1907年90,373（14,462）10歳，1917年103,611（18,012）21歳，第1回国勢調査の1920年108,113（21,276）である。早川は，小樽の発展と共に育ったと言えよう。1928年に日本郵船営業案内（英文）では，Otaru Cityを“The most important port city along the Western coast and forming the gate way to Western Hokkaido (pop.128,000), is within one hour from Sapporo.”と紹介されている。なお，早川42歳のときに開かれた小樽開港大博覧会（1931）について触れている早川（1947d）では，小樽を「商港都市」（p. 90）と呼んでいる。前年の1930年に行われた第3回国勢調査による当時の人口は，144,887と増加しており，街のさらなる発展が裏付けられる。

市街地は天狗山と呼ばれる山の麓にあるなかで，人々の関係は都会としては密であった。早川は狭い市街地で10歳年下の伊藤　整[5]（1905–1969）と同じく，旧制北海道庁立小樽中学校で学び，成長したが，当時どの程度交流があったかは筆者には不明である。中学校時代の友人には，先輩の岡田三郎[6]（1890–1954，小説家）もいる。早川は，地元の小樽高等商業学校（現小樽商科大学）ではなく，理系の東北帝国大学札幌農科大学予科（北海道大学の前身の一つ）に進学した。しかし，当時の北海道で北海道帝国大学農学部農業経済学科に並ぶ，唯一の社会科学系の高等教育機関であった小樽高等商業学校の教師陣とも長ずるに及んで親交があり，学問上の知己に手塚壽郎（1896–1943），大熊信行（1893–1977）などがいた。手塚は，小樽高商（現小樽商科大学）卒業後，東京高商（現一橋大学）を卒業し，母校小樽高商の教授となった「ゴッセン研究」などの翻訳もある著名な経済学者である。早川にもゴッセン（Hermann, Heinrich Gossen, 1810–1858）に関する

翻訳や研究論文がある。

1920年1月に東京帝国大学経済学部助教授森戸辰男（1988–1984）が東京大学経済学部の学術機関誌『経済学研究』創刊号に書いた「クロポトキンの社会思想の研究」で編集発行名義人大内兵衛と共に「朝憲紊乱他の罪」で起訴された，いわゆる森戸事件からの取り締まりが強化したとき，その影響の波及を心配した小樽高商教授大西猪之助（1888–1922）は，早川に卒業論文の当初の論題「クロポトキンの農業理論の批判的研究」[7]（年譜，p. 466）を変更するよう助言し，早川は論題を「収穫逓減法則の研究」に変更した。（大西には，主著に『囚われの経済学』（東京寶文館，1920）があるだけでなく，没後には12冊の全集がある。大西が早川の欧州留学中の1922年3月に急逝したことは「1.2有島武郎との関係」で既に述べた。）

大熊信行（1893–1977）は，1921年に小樽高等商業学校の講師【翌年教授，1923年病気退職】となり，小林多喜二，伊藤　整らを教えている。大西・手塚などと共に，福田徳三（1874–1930）門下の経済学者であるとともに，石川啄木（1886–1912）に影響を受けた歌人でもある。早川は，1937年に神戸で開催された社会学会で，同人歌集『まるめら』の主宰者でもある大熊や経済学者で歌人でもある高田保馬（1883–1972）と出会い，アララギに入会している。大熊は日本文学報告会の理事でもあった。高田は1946年1月に京都大学名誉教授になったが，同年12月に東亜民主主義などを唱えたことを理由に教職不適格となり教職を追放されている。[8] 2011年に小樽市小樽文学館で行われた「小樽高商・商大ゆかりの文人経済学者たち：大熊信行・早川三代治・大西猪之助」という特別展（2011年7月2日～8月28日）からも交流の様が判る。

1.4　経済学者としての研究

経済学者としての早川は，限界革命と呼ばれる，いわゆる近代経済学理論を日本に紹介した経済学者の一人として著名である（松田，2015b；Matsuda，2014；上久保，前掲書）。当時はマルクス経済学が主流の時代で，近代経済学理論は数学的に表現する数理経済学とも呼ばれていたが，その研究者は日本ではまだ少数であった。早川は，その分野の研究の他にパレート分布などの研究で計量経済学者・実証的経済学分野での功績でも評価されている（松田，同上；寺崎，1986；上久保，同上書；汐見・毛里他，1933）。

早川は，1921年に北海道帝国大学を卒業後，私費でドイツのボン大学に留学した。6月に船でコロンボ（スリランカ）を経て，11月にドイツのボン大学哲学科に入学している。1923年5月にベルリン大学哲学科へ転学している。翌1924年2月以降は，ローマやウィーンに滞在し，6月には大学生の頃から憧れていたシュンペータ（当時は銀行総裁）を訪問している。ハンガリーに旅行した後，同年11月にマルセイユから船で帰途につき，1925年1月に帰国した。

帰国3か月後は，母校の北海道帝国大学農学部・工学部の講師に着任した。その後，経済学・興業経済学・財政学などの講義，経済学ゼミナールを担当する助教授になっていたが，1936年3月，家業のため退官し，一時教職を退いていた（早川，1947a，pp. 9–10）。1948年に，商科大学昇格を目指す小樽経済専門学校（旧称小樽高等商業）に経済学原論・経済学史などの担当教授として任用された。その後，小樽商科大学商学部を定年前に退職し，早稲田大学教育学部で教鞭をとり，長年，所得資産分布の研究を続け，その集大成である「パレート法則による所得と財産分布に関する研究」により，1960年に早稲田大学から経済学博士の学位を得た。

ドイツ留学から帰国後の数年は，ワルラスやパレートなどの当時はまだ日本ではあまり知られていなかった数理経済学者の紹介のための翻訳や研究をするとともに，耕地資産の分布などの資産・所得分布の研究を継続して行った。1932年に高岡熊雄教授在職35年記念論文集『農政と経

済』に書かれた「我邦耕地の分配状態に就て」(1933年にイタリアの*Giornale Degli Economisti*のannoXLVⅢ. No. 9にも投稿掲載)では，北海道での土地や土地利用の所有の不平等度が高いことが指摘されており，1932年6月に汐見三郎（1895–1962）が京都大学の『經濟論叢』第34巻6号に発表した「国民所得の分配の型を論ず」や，汐見三郎·毛里英於菟·武田長太郎·益田熊雄（1933）『国民所得の分配』（金融経済研究会紀要）とともに資産・所得分布研究で高く評価されている(Matsuda，前掲，pp. 56–59)。その後も，1934年に「旭川市に於ける所得分布」，1935年に「所得の社会的ピラミッドに就いて」および「農村に於ける所得分布」,1938年に「所得分布の形態に就て」など継続した研究が行われている。1944年には「所得分布に関する諸考察」が日本統計学会編『国民所得とその分布』日本評論社に掲載された。

経済学者としての早川の研究は，数理経済を用いた所得・資産分布などの実証的研究であり，土地所有における不平等の実態の把握などをしていたといえる。

1.5　家業の地主・企業家

早川家は祖父両三の代からの「商人地主」で小作も抱えていた。小樽商人のうち，北陸出身者は出身地の北陸地方から米や雑貨類を入れ，代わりに肥料用のニシン粕を運ぶことで海産物商売に手を染めた北陸系商人として，新潟出身の高橋直治・板谷宮吉の他に早川両三や山本厚三の父久右衛門らの名が挙がっている（小樽商工会議所，1995b)。早川両三は，1905年には「不動産・農林水産取引き」，1906年には，第五高等商業学校の敷地購入のため1万円の寄付をしているなど，早川家は次第に財力を付けてきていることが判る（年譜，p. 464，小樽商科大学百年史編纂室，2011a / 2011b)。

平成7年に当小樽商工会議所が創立100周年を迎えたのを記念して刊行された『小樽商工会議所百年史』では，「小樽の豪商といわれたような人たちは，本業が安定するとすぐ土地に手を出す傾向が特に目立っていた」と「商人地主」の出現が指摘され，「表1　商人地主」には「11. 早川両三　寿都郡黒松内町の未墾地に17戸を入れ，1908年買った岩内郡前田村に12戸を入れた。留萌郡天登雁333町歩の貸付地を牧場に」とあり（小樽商工会議所, 1995b)，祖父早川両三が「商人地主」の一人であったことが判る。ちなみに同じ表には小林多喜二（1903–1933）の「不在地主」のモデルになった磯野農場の農場主，「13.磯野進　下富良野に175町歩の田など193町歩の農場」の記録もある（小樽商工会議所，1995a)。

早川は，職業としては大学教員であったが，家業の地主も継いでいる。(1.1および1.2参照)1941年3月に「旭川在農地の解放（自作農創設【法による】)」（年譜，p. 471)，長編小説＜土と人＞第一部の『根』を刊行した1945年4月には，「前田村自作農創設作業を完了し，主な所有地山林処理問題おおむね整理終わる」[9]（同上，p. 472）と書かれている。これらから，山林を含む所有地の処理は個人資産なので詳細は不明であるが，早川は終戦後に行われた「農地改革」ではあまりひどい影響は蒙らなかったと推測される。また，自伝的作品と考えられる「若い地主」や「農地解放」にも関連すると推測される事柄がより具体的に書かれている。(1.6参照)

早川は，教職から離れていた戦時中には鉄工場の経営も行っている。「昭和十九年九月某鉄工場を買収，有限会社小樽鉄工所として代表取締役に就く」(同上，p. 472)。小樽で初めて空襲警報が出された1945年6月27日〔ママ〕午前11時20分頃に，「鉄工場にゐて藤平親方と上半期に出す従業員のボーナスに就いて相談中であった」（早川，1947f，pp. 14–15)。従業員は5名であるが社長と呼ばれ，ライオンズ倶楽部が時節柄解散して名前を変えた火曜倶楽部のメンバーでもあり，大きな屋敷に住み，空襲の際には，帝国銀行支店地下室を借りて，有価証券類を自宅から移している（年

譜，p. 472)。「顔を出す色々の會合で，O市の米穀事情が極めて切迫してゐることを，実業界，財界，官庁，公区方面の有力者の口から聞いた」（早川，1947d，p. 137)。大学教員をやめていた時期ではあるが，早川は，依然として財産家で，「町の名士」の一人であったと推測される。戦後に教職に戻った後も，地元企業北海製紙の監査役を務めているなど，企業活動も続けていた。

つまり早川は，経済学者，大学教員，文学者，地主，鉄工場経営者など[10] 多様な活動をした人物であった。

1.6 「土」・「土地」への関心

このような早川の生立ちや複数の「顔」の共通基盤は「土」・「土地」である。すなわち農林業（畑作・水田耕作と山林）である。耕作地所有面積や所得稼得の分布の経済学的実証研究は，裏を返せば不平等社会の実証的研究でもある。

早川は，文学者としては，戯曲・詩や小説，随筆・旅行記など様々なジャンルで書いている。そのなかで「土」・「土地」に関する文学作品には，戯曲に「入地」（初出『劇と評論』昭和七年所十一月号所載，『トレ グラチエ 戯曲集』所収（pp. 1–34）や，随筆には1946年の「養ひの土地――小樽」があるが，その中核は土・土地の小説である。

早川の文学作品で土・土地を扱った小説には，生前には全部は刊行されなかったが，北海道の凶作続きの釧路原野の虹別開墾村の歴史を描いた[11] 長編小説＜土と人＞五部作[12] がある。また，私小説的な作品ととれる『若い地主』および「農地解放」（未刊行），東京大空襲難民の入植者を描いた「冷たい土地」[13]（未刊行）などがある。

『若い地主』が刊行されたのは，第二次世界大戦後の1947年7月であるが，その元となった「ポム神惠の地主」が書かれたのは，戦中の1938年である（年譜，p. 470)。この作品の主人公の信吉は，不在地主であるということを自覚し，小作に対しての憐れみの情を持ってはいるが，「師のやうに純粋に思想と行為の一貫性を押しつめゆくことは信吉の弱い性格では無理であった」（同書，pp. 133–134)。これは，早川自身とその師である有島を想起させる記述である。また，そこに書かれている，凶冷や他の自然災害による農業被害，そして小作人の逃亡，襤褸を来た小作や汚い顔をした子どもたちの悲惨な有様などの問題は，まさに「処女地」で書かれている小作人の生活である。「処女地」の主人公が凶作で不幸になっていくのを，早川は自分の小作の一人であるかのように見て，「主人公になりきろうとした」（同書，「まえがき」p. 5）と推測される。

では，このように早川を弱者の立場に立たせようとするのは，どうした力であろうか。どこから来ているのであろうか。早川の「海から」という随筆の最初の方に，「一革命家の思出」の一部をふと思い出したということや，その後の漫歩の折には常にこの革命家のことが頭に浮かんだと書かれている。これは，クロポトキン（Peter Kropotkin，1842–1921）が1899年に英語で出版した“Memoirs of a Revolutionist”を，1920年2月に大杉栄が主としてフランス語版（1901，Autour d’une Vie［ある生涯をめぐって］，パリ：ストック社）から邦訳した「一革命家の思出」（春陽堂）のことであろう（高杉，1979，p. 294)。

> 然し，その漫歩とても常に樂しいものとは限らなかつた。恣な連想は私を色々の方面へと誘惑しに來た。
>
> その一つだつた。その日，漫歩しながら，私はふと「革命家の思出」のある部分を思ひ浮べた。それは牢獄に投ぜられた一革命家が他日の好機会に備へるために，体力を衰へさせぬ様にと，毎日回数を定めて独房の内を歩き廻つた，と云ふ経験談だつた。彼と

私との相違は思ふだに愚かしい事であるが，努めて漫歩の運動をしやうとする時に，頭に浮かび出るのは常に此革命家の事だつた。（早川（1933）「海から」p. 3。下線は筆者，以下同様。）

早川はクロポトキンと自分の違いを認識しているにも関わらず，クロポトキンのことを考えてしまうくらい，クロポトキンの考えは，師の有島は達成したのに自分には達成できない，早川にとって苦しい理想として心の中に大きな位置を占めていたと推測される。

これらの作品で書かれていることは，地主の実体験と経済学者の知見という両眼による，農業と農村をめぐる，貧困の低所得階層の生活についての写実の試みである。それは，師の有島のように，「クロポトキンの書物を読み，物の所有に疑問を感じた」（「農場開放顛末」）というような正面からの思想的批判は敢えて避けた，国家総動員法下での静かな，不平等社会の実態の指摘だったのではないかと推定される。

2. 研究の狙い

本稿では，有島武郎の弟子であるが，「知られざる文学者」であった早川三代治が，これらの耕地資産の分布などの資産・所得分布の論文と併行して書いた長編小説で，第二次世界大戦中の用紙の統制と出版規制のなかで，[14] ようやく1942年12月に元元書房から最初に刊行した第二部『処女地』を取り上げ，そこに描かれた開墾移民の中の，夜逃げした一人の「敗者」に焦点を当て，その没落の過程を整理検討し，著者の意図したと考えられる社会的な問題を浮き彫りにする。なお，表題にも含まれている「敗者」という表現は，同作品の長い「はじめに」に「主人公は人生に敗れた一農夫」とあるところから取ったものである。

同書は現時点では入手が困難だと思われるので，引用には初出書ではなく，入手が比較的容易だと考えられる，『北海道文学全集第9巻』（1980年立風書房刊行）に再録されている「処女地」（pp. 5–255）を使用した。

以下の本文での学歴，職歴についての記述は，すべて早川治男・早川佳郎編（2012b）「早川三代治　年譜」による。引用には「年譜，p. 464」と略記する。ただし，作品第二部『処女地』からの引用については，その出所9ページを（9），10－11ページを（10–11）などと，本文中に括弧書きでページ番号のみを示す。また，早川（1945）『第一部　根』寶文館からの引用の場合には，（根9）とする。

なお，『処女地』の作品分析を主眼とした先行研究はないと思われるので，早川三代治に関する他の先行研究については，ここでは触れず，金城（2014）と上記全集の「解説」（神谷，1980）等に譲る。

3. 作品の概要

3.1　長編小説＜土と人＞の形成と戦時下での出版開始

長編小説＜土と人＞は，早川の文学作品で唯一の長編小説として，当初は四部作として書かれた，北海道虹別開墾村の許可移民の物語である。第一部『根』，第二部『処女地』，第三部『土から生まれるもの』，第四部『生ける地』に，第五部『地飢ゆ』が戦後に書かれ，第六部「ひこばえ」の構想が昭和25年に浮かび，最終的には六部作となるよう構想され，資料収集が行われたと推定

される（年譜，p. 472）。その形成過程の検討については，金城（2014）前掲で詳論している。

この「ライフワーク」[15] というべき連作で，1942年（昭和17年）に，第二部が最初に出版された。当時は，国家総動員法の下，出版も紙も統制下に置かれていて，大島豊の助力で，まず，第二部『処女地』が寶文館から出版された。（注4参照）それは執筆されてから約10年後のことであった。その事情については，同書の「はじめに」に詳述されている。なお，早川は「私は序文嫌いである。著書それ自身を以って総てを語らしむべきであると思うからである。然るに時世はこのようなまえがきを必要とせしめたのである。＜後略＞」と書いているように，長い「はじめに」が付いているのは，連作中，この作品だけである。

早川は，「はじめに」で執筆意図を「私は陰惨にも悲惨にも恐れない強剛さを欲する故に，この陰惨の底から生き上ろうとする力を感得したい故に，この『処女地』の主人公に成りきろうとした」（5）と述べている。しかし，物語の結末では，主人公の「運命は転落してゆく石のように止まる処を知らなかった。そうしてその止まった時は即ち彼の死であった」と，アンハッピーエンドになっている。それは，早川が多数の屍や労苦が豊かな土を作り，苛酷な自然が最後には豊かな地になることを，人間が「無数の悲惨な生活を堆肥として，極めて徐々に，極めて隠密のうちに，悲惨な生活からの向上が萌しているのである」（5–6）と考えているからであろうと「はじめに」からは推定される。

しかし，なぜ出版は第一部からではなく第二部から行われたのであろうか。第二部につけられた「はじめに」には，「土地と開墾者の死闘」（6）での開墾者の勝利の記述「不毛と言われた処女地も，惨酷無比と思われた自然も遂にこれらの人々の不屈の労苦に酬えたのである」（6）がある。しかし，これは，長編小説の当初の完結部であった第四部での虹別開墾村の歴史の最後の部分としては妥当だとしても，第二部の結論とは明らかに合わない。また，本文中には，人物紹介の記述がされぬままに唐突に開墾村の第一部の登場人物谷村が現われたり（88），そもそも同村への許可移民の入植時の様子が主人公の回想や夢以外ではほとんど描かれていなかったりすることなどからも，長編小説の発表として当初から早川が予定していたとは思えない。また，内容が治安維持法への抵触の恐れということも，戦前に書かれた第四部までは戦前に出版されているのであるから，それも理由とは考えにくい。早川は，第二部『処女地』の出版された前年，1941年11月発行『北大文芸』42号に掲載された短篇「野火」が検閲で部分削除されるという経験をしているが，削除された部分のページから判断すると，思想的な理由によるものではなく，心中が描かれていて，「公俗良序に反する」ということのようである。

それでも第二部を先に出版した理由は，本作品の前半が，「鶴の棲息地」として『北大文芸』に昭和9年6月から翌10年10月に中断するまで発表されていたことや（年譜，pp. 469–470），それに加え，この作品の，登場人物に強いスポットライトを当てたドラマチックな構成から考えると，早川の文学的創作活動において，その重点が戯曲から小説への移行期にあったことも関係するのではないかと推測される。1925年に留学を終え欧州から帰国した後，教職の傍ら，翌1926年からは「理論経済学の文献研究にあわせ関係原書の翻訳作業」をしているが，同年10月には秋田雨雀を招いたり，劇についての講演を聴いている。また，翌1927年には，藤村に戯曲作品を認められ，「評価と指導をうけるようになる。」（同上）長編小説＜土と人＞のテーマを得たという1932年には，それまでに書いた戯曲をまとめた第一戯曲集『聖女の肉体』（明窓社）を出し，1933年の末には，「新しき縄」が新劇座によって上演されている（年譜，p. 469）。1934年には，『処女地』の初稿である「鶴の棲息地」を『北大文芸』に連載し始める。1936年には第二戯曲集『トレグラチエ』（丸善札幌，私家本）を，1937年には第三戯曲集『マダムレア』（同上社）から出版している。『処女地』が出

版された1942年以後は，10月に藤村が死去したこともあってか，戯曲の発表はないようである。

3.2　第二部の設定

長編小説＜土と人＞は，昭和4年（1929）の虹別開拓村への移住から始まっている。不景気が広がる中，昭和6・7，9・10年と，東北北海道地方は「昭和初期凶作群」に襲われた。「東北農業研究センター水稲冷害早期警戒システム」国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（通称「農研機構」）によると，「冷害は平均して起こりやすいのではなく，波状的に襲ってくるから惨禍はさらに大きくなる。この例として顕著なのが，元禄【ママ】・天保・文明の凶作群である」（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構，2015）。明治以降も「明治凶作群」（明治35・38・39）があり，さらにそれを上回る「昭和凶作群」（昭和6・7・9・10）に襲われ，北海道や東北では農作物の収穫減率は甚だしかった（同上）。虹別開墾村は，周りが「平作」のときでも「凶作」という，寒冷な泥炭地という土地柄であったので被害は甚大であったことが推測される。

『処女地』は，入地からあしかけ4年が過ぎた昭和7年に，主人公である許可移民の「大崎常造一家は自分で開墾した土地に喰いつめられてしまった。」という文で始まる。「開墾した土地が収穫を与えず土地の為に食い殺されたという意味で」，「三ヶ年の大凶作は彼【主人公大崎常造，以下大崎と略記】に労苦と借金だけで酬いた」結果，大崎は逃亡を考え始める。「濃霧（ガス）と土地に喰い殺されてしまう」ため，既に移住民の「三分の一位」は，「どっかへ消えて行ってしま」っていると，大崎たちの移民団が入地するために通過したときのことを知っている，標茶旧市街地の宿の亭主が語っている（54）。

この物語の始まる昭和7年は，「昭和六，七年の世界的不景気のただ中にあった，北海道，殊に根室，釧路原野を襲うた連年の大凶作を生色なき原頭に立って目のあたりに視た時，私のうちに一つの主題が胚胎した」時点に一致する（5）。

3.3　粗筋・物語の構成

第二部『処女地』は，長編小説＜土と人＞の中で，昭和4年の早春に入植した第一回移民団体130人ほどの中の，「人生に敗れた開拓移住民」の大崎を主人公にしている（根159）。

物語は，回想部分や夢で語られる主人公の入植した昭和4年初春から主人公と思しき死体が釧路原野で腐乱死体として発見される昭和9年5月までの，あしかけ6年の，凶作続きに家族も財産も失い，最後は原野の土になった北海道の移住民を襲った悲劇の連鎖の生活を書いている。

場所と出来事から，（1）入植地を捨てる決心に至る経緯，（2）土地探しの旅，（3）夜逃げの実行まで，（4）釧路原野の新しい土地での悲惨な生活，（5）不況下の釧路の町での彷徨の日々，（6）結末部：釧路原野での死体の発見，の六つに分けることができる。

3.4　語りの視点

物語は，「大崎常造一家は」と，主人公の名前から始まる。早川は，「主人公になりきろうとした」と「はじめに」に書いている。しかし，物語自体は一人称では語られず，語りの視点は話の流れが俯瞰できる創造主としての存在である著者にある。

したがって，文体には第三人称の代名詞「彼」が多用されている。特に特徴的なのは，第三人称の所有格を使った擬人文が，他の擬人文と同様多数使われていることである。特に，大崎が新たな開墾地を探しに釧路原野に分け入る4泊5日の長旅では，「彼の＋体の部位」という用法が多数見受けられる。それは，有島武郎の“An Incident”【題だけが英語で中身は日本語】にも見られ

る欧文脈である（金城，2012）。ただ，欧文脈としての文体解釈については，本稿の主目的から外れるので，ここでは，これ以上は触れない。

3.5　二つのシンボル

物語には，鶴と標杙という二つのシンボル的存在が何回も登場し，物語の先行きを暗示したり，物語の展開を牽引したりしている。これらのシンボルは，この作品を舞台にかけた場合にも効果があると推測されることからも，早川の戯曲から小説への過渡期の作品である傍証とも言えよう。

3.5.1　鶴

鶴は，最初平和や希望のシンボルの白い鳥として登場し，先住民族であるアイヌの伝承や踊りが紹介されている。

美しい鶴の棲む泥炭地は百姓の耕作には向かないことも，作品のあちこちに書かれている。

主人公は新しい入植地を探しに釧路湿原に野宿の旅を重ねる中，ある夜「夢幻の裡に聞いた声」を，「おらの」土地が見つかったときに，「爽かな不思議な声」として聞きそれが鶴であることを知る。そして，「鶴だ！鶴だ！」と絶叫し，「こみ上がって来る感動に押され」，「鶴が棲んでいる処だぞ」と家族を説得する「肚が出来上がった」（44）。

しかし，家族とともに移り住んだ「おらが土地」で，末娘が溺れ死んだ川の側から鶴が二羽飛び立つのを目撃したり（168），卵を獲ろうと湿地（やち）の浮島の巣に近寄ると，「叢の中から，自分をじっと凝視しつつ，今にも襲いかからんとする，鋭い光る目と鋭利な剣のような黒い長い嘴を見」て，立ちすくんだりする中で（186），鶴は恐ろしい存在に変わり，物語は奈落の底へ転がり出す（185–188）。鶴の耳をつんざくような泣き声がそれを暗示する。

鶴の登場は全篇に亘るが，物語の結末部では，「百姓だってあれまでには保護されていない」と巡査が「皮肉そうに」言う（253）。天然記念物の丹頂鶴について，著者の分身と思われる博物学者は，「美しい鳥ではあるが，この土地では棲息が許されぬ時が来たのです。でも，大きな目から見れば，それが自然の法則なのだろう」と指摘する（254–255）。

3.5.2　杙標

二つ目のシンボルは棒杙【太い四角い棒】である。これは大崎が逃亡先の「新しい土地」に建てるつもりの所有者杙であったが，棒杙に墨書を頼まれた赤井を始め，それを見る者は皆，墓標を連想する（69–74）。妻も「新しい土地」に立てられた杙を「墓標のようで，気味が悪い」と言う（176）。あまりにも明瞭に物語の先が墓に繋がるであろうという予測を読者に与える。

大崎は，皆の反応にいら立つが，杙標を建てた地で死んだ4人の家族の墓を残して「二度目の逃亡」する時になって，「大崎常造所有地」という標杙の文字が「『大崎常造之墓』というように見え」，やはり「縁起の悪いことだったのか」と身震いする（199）。

3.6　登場人物

長編小説＜土と人＞の他の作品と比べ，この物語に登場する人物はあまり多くない。それは大崎が開墾地を捨てたため村人達がほとんど登場しないからである。

3.6.1　主人公大崎常造の履歴書

大崎についての記述は，小説のあちらこちらに散在している。それをまとめると，次のような人物像が浮かび上がってくる。しかし，顔立ちや仕草表情などについての描写はほとんどない。

大崎常造：35歳（享年36歳）

生没年：1898（明治31）―推定没年1934（昭和9年）
学歴：小学校卒（199）
出身地：岩手県からの団体移住（232・233）
現住所：北海道釧路国河上郡虹別原野六十九線北十九号
入植年：1929年（昭和4年）
土　地：15町歩（すでに高利貸しの手に渡っている）（121）
職　業：農業（郷里では「二,三反の水田を小作する水呑み百姓」）（29）
性　格：物語の最初の部分では行動的・楽観的，時に現実と空想との区別がつかなくなる面がある。たとえば，「自分が土地を盗みとりに行くんだと云うことすら忘れていた。何処かに土地を見つけると，それはそのまますぐ自分のものであるような気になっていた」（17）。
「新しい土地」に移って直ぐは，借金から開放され自信にみち，開拓を逞しくこなしていく，家族思いの優しい男である（142）。役人の前では臆病，警察では本音が言えないが，土地のことになると，よくしゃべる（233）。
体　格：逞しい筋肉（124），太い両腕（130）
家　族：7人
祖母：お若75歳（享年76歳）
父：勉造57歳（享年57歳）
母：お種年齢不詳（享年不明）
妻：お捨年齢不詳（享年不明）
長男：秀造10歳
長女：お松8歳
次女：お常6歳（享年7歳）
親　戚：警察の調べでは富山に兄弟がいるらしいが，本人は「小さい時分に別れてしまい」知らない（237）。胆振に遠縁のものがいるが，「あてにならない」（同前）。
野　心：百町歩の大地主になること（7），畑と水田と牧場と澱粉工場を持つこと（29）。

3.6.2　開墾村や村に出入りする人々など

虹別の市街地には，「道路の左右に十数戸ほどの低い家屋が建ち並んでいるに過ぎないが，その中には駅逓所，移住民世話所，郵便局，蹄鉄屋，雑貨店兼宿屋飲食店なぞがあって，其処から枝のように別れる原野の開墾地の心臓を為す地点なので互に遠く離れて暮らしている入地者にとって立派な市街地なのである」（60）。拓殖鉄道の通じて「停車場が釧路川の向こうの東側へ建っ」たのに伴って市街地も移り，それ以前の市街地は「村役場と巡査派出所と神社とお寺と小学校と郵便局のほかは，辛うじて生計を立てているにすぎなかった」（17）。

①民世話所の世話人秋田さん

移住者の受け入れや補助金の支払いなどを仕事とする，この長編小説のどの作品にも登場する主要人物である。大崎がこの世話人に会うのを避けているのは，夜逃げの魂胆があるからで，「何処へ，何しに行くかね。この忙しい時に。」とバスの中で秋田に声をかけられることを想像するだけで「ぎくっとせずにはいられなかった」ほど怖れただけでなく（15），「苦手」意識をもっていた（70）からでもあろうと推測される。

②寺の和尚，学校の先生，生方牧場管理人の赤井さん，木挽屋，医者，保健婦，神主，巡査，

皆，市街地住いで，必要なときには弟子屈など近隣の地域からも呼ばれてくる。木挽屋は，大崎が杙標を作るときには木を削り，父親の葬儀には棺桶を作り，肉親に代って棺桶を載せた馬車を村の「火葬場」（原始林の一区画）に御して行き，火葬役まで引き受けている（91-92）。

文字の読み書きができる人は，秋田，赤井，小学校の先生，お寺の坊さんの4人だけである（70）。

③精農，津田爺さん，横尾爺さん

凶作対策事業などの交渉のときに表に立たされる（68）。津田爺さんは，数町離れた近隣に住む，大崎とは同郷で交流がある（8）。

④小坂商店

店名ではなく店主の呼称としても使われていることから，小坂が「人でなし」扱いされていることが推測される。

「荒物と雑貨を石垣にしてその上にとぐろを巻いているような」雑貨商で高利貸しの小坂商店は店の一部が飲食店になっていて，大崎と同じような百姓が午前中から「もっきり」と呼ばれている焼酎を飲んでいる（61）。小坂商店は，掛売りと，土地を担保に高利で金を貸すという二つの方法で開墾村の百姓からお金と土地を集めている（76）。

⑤沼内

釧路市在住の新開墾地移民相手の，「債鬼」とも呼ばれる，取り立てのきつい高利貸しで大地主で，大崎も痛めつけられている（76）。

⑥その他

秋祭りにやって来る「三文商人」たちの群れ，客観的な目で虹別地区や他の近隣の収穫や，道庁への政策批判まで論じる標茶旧市街の，馬宿も兼ねている旅人宿の亭主と女房（17），原野の真ん中で出くわし大崎を驚かせた牛熊村の阿波団の老農民，塘路駅の若い駅員，「原野の者の嬶」（58）など。

3.6.3　釧路で出会った人々

二度目の土地捨て以降に登場する人物を簡単に列挙すると以下のとおりである。

①釧路までの旅で：釧路への途中であって道を訊ねた農夫，釧路で安宿を教えてくれた年輩の百姓
②釧路近郊での宿泊の際に：最初の宿の亭主，馬・馬車の買人，古着屋
③釧路の町で：釧路駅の若い駅員，大崎が納屋にもぐり込み警察に突き出された屋敷の主人と，その屋敷の女中
④釧路の町を彷徨しているときに強盗に間違われて連れて行かれた丘の上の警察本署で巡査・看守・司法主任の警部・別の巡査
⑤鉄道自殺を図って入院した病院で：看護婦・警察・市役所の人・市役所から巡査と官吏・同室の入院患者2，3人
⑥賃宿に宿泊した2日間：亭主・同宿客・焼き鳥屋の女将・客引き老女・丸髷女
⑦サムライ部落【バタヤ民部落】の人々：大崎の下宿先の老婆・部落の世話人・主だったメンバー・死体を仲間に解剖用に私立病院に10円で売られた部落の元住人加藤爺さん
⑧大崎の死体を発見した人々：釧路原野に視察に来ていた老博物学者・巡査・警察医・人夫・猟師

4. 凶作続きの開墾村での農民の生活

4.1 虹別の今昔

虹別は，現在は標茶町の一地区である。標茶町は北海道の東部に位置し，「東京都の約半分の広大な面積を有する町」である（標茶町，2015a）。

現在の標茶町は，「最北部は阿寒国立公園の一部が広がり二つの国立公園を有する大自然にかこまれた雄大な環境」に恵まれている地域で，「人口8,169人（平成25年7月末）に対して，乳牛が約4万2千頭と人口より乳牛が多いのどかな町」でもある（標茶町，2015b）。「南部は貴重な動植物の宝庫であり，塘路湖を含む釧路湿原国立公園の湿地帯が広く分布し，北部は火山灰層に覆われた根釧台地が広がり，酪農を基幹産業とする田園地帯」となっていて，この小説に描かれているような悲惨なことがあった土地とは別の趣のある所である（標茶町，2015c）。同町には移住相談窓口があり，今でも移住者を募集していて，「標茶への移住のご案内」に書かれているのは，＜土と人＞に書かれた当時とは想像を超える厚遇である。

4.2 移住地の現実

4.2.1 開墾ブローカー

移住地は，原始林の覆っている地域だと聞かされて郷里を離れて来た入地者の期待は，「開墾ブローカー」の存在で破られる。

> ［大崎が，自分が見つけてきた「向うの土地」が素晴らしいという理由は，］山と云う山がみんな樹林で深々と掩われていることがそれである。このことだけでもみんなを羨ましがらせるに充分であった。彼等が入地したこの虹別原野が，実際に来て見れば，ある筈であった樹木が思ったよりもずっと少なかった意外な失望をまざまざと思い出したからであった。森林は移住民の入地する前に開墾ブローカーという松けむしの為に喰い尽くされてしまうのが，殆ど当たり前のことのようにされているためである。
> 「そんなにあるなら二年や三年，炭焼きばかりしていても食べられるなあ。」
> と思わず父親の勉造が感嘆の声をもらした程であった。（65）

開墾ブローカーの他にも，先に入地した開墾者によって隣接する土地に生える目ぼしい樹の「盗み伐り」が行われている。例えば，「第一部　根」で，まだ雪深い2月に一早く福島県双葉郡熊町村からやって来た移住民の竹下（38歳）が，そのいい例である（根61-62）。

大崎は，「盗み作り」で入り込んだ原野では，「冬山の主人であり」，「巨大な立木の持ち主」で，思う存分に大木を伐り，炭を焼いた（145）。しかし，大崎は，自分の入り込んだ地所が官有地であることも，舌辛村であることも，警察署で警部に言われるまで知らなかった（234）。

4.2.2 泥炭地

その上，この盗み作りで入った土地は，泥炭地であった。泥炭とは，「北海道のように寒い地域で，湿原の植物は完全に土に還ることができず，枯れた植物が，完全に分解することなく積み重なった，黒褐色の土壌」のことである[16]（美唄市，2015）。つまり，泥炭地は，畑や田として利用するための，有機物質が分解してできる肥沃な土がない，耕作には不向きな土地である。

逃げ出してきた虹別開墾地も，濃霧（ガス），早霜，冷夏，夏の日照不足と，気候も劣悪な上，虫害も

加わり，不毛の火山灰地であった。第一部『根』でも，老アイヌが「原野の地味は火山灰で痩せている，従つて肥料を澤山やらなければならぬ」と助言する（根55）。しかし，移住民には役人や役所に対する妄信とも言えるほどの強い信頼がある。

> 役人からは，一度として火山灰地で地味の痩せていることを聞かされたことはないので，意外のことであったが，肥料をやれば出来るというなら，そう大して悪い土地でもあるまいし，お役所がそんなひどい土地に，沢山の移住民を入れるわけもあるまいと考え，老アイヌが他人を羨ましがって，あんなことを言うのだろうと考えた。（根55）

火山灰地や泥炭地が不毛なのを知らないのは，北海道庁殖民課の若い役人が移住説明会で村の皆に見せた宣伝映画の中に繰り広げられた美しく天国のような土地だと信じて移住してきた許可移民たちだけであった（24-26）。

大崎も，釧路原野に「道庁で世話やいて移民を入れるってなら，やっぱり出来る見込みがあるからでしょう。出来る見込みのない土地を，わざわざ金かけて開墾させるわけはないから」と言うと，標茶旧市街地の宿の亭主は，道庁の開拓政策への不審を示す。

> 出来る見込みだけで間違いないのなら，今の虹別だって，もっと出来る見込みだったんだがね。その見込みが今じゃあ，ちっとも当てにならないってことでしょう。道庁の見込みなんてものはみんなそんなものだね。（51）

4.2.3　連年の凶作

大崎は，連年の凶作で，「自分で開墾した土地に喰いつめられてしまい，「此処へ入地して以来，自分の身体で経験した事は，結局土地の不毛ということであった」と気づく（6）。

昭和4年の3月に入地してからの虹別開墾地の作柄は次のように書かれている（8）。

①初年　凶作【原因】とてつもなく早い，ひどい霜。
【生育と収穫の状況】蒔いた畑のものは生育したものの，一夜で収穫を皆無。
【収入】無し。

②二年目凶作【原因】六月から七月へかけての濃霧と降雨とは，畑の作物から日光と暖気を奪いとって終ったばかりではなく，彼等自身達を夏中寒さに震えさせて置く程であった。
【生育と収穫の状況】前年の早霜を気遣い，収穫を早める為に早蒔きの危険を冒したが，作物は何もかも，べとべとに立腐れた。

③三年目凶作【原因】新しい開墾地に早くも，ひどい病虫害が湧いて出て来た。
【生育と収穫の状況】ようやく作物らしいものになりかかり，辛くも取り入れたものもあった。（その収穫物とは，「馬鈴薯，燕麦，蒲麦，稗，菜種，唐黍，大豆，青豌，大手亡，葱，玉葱，南瓜と数えあげれば豊富のようでも，どれもこれも，不出来でほんのちょっぴり[ママ]ずつであった。（140）
【収入】収穫物は先ず借金に取られた。しかも他の地方の一般の豊作に側杖喰って彼の気づかない儘に，安値に叩かれてしまった。彼の手元には一家の食い料さえ残らなかった。

④年目大凶作：作物は何もかにも駄目で，収穫皆無（89）

三年目に病虫害を免れたものをやっと収穫できたが，借金の支払い分として取り上げられ，手元には一家の食費にも不足なほどしか残らなかった。しかも借金はこれで全済できたわけではなく，「土地をそっくり債権者へ渡して」「小作になってもおらの処のような大借金は死ぬまでかかっても返しきれない」ほどの額になっている（8）。

この土地を大崎は，「人間の土地ということが出来ない」，「その証拠には，この収穫物を見てくれ。五年も六年もの，[17] 死にもの狂いの労働に対してあの土地は何を酬えてくれたのだろう」と，「死の谷間へ，つき落されるような心地で，茫然と目前の収穫物に対っていた（140）。

4.3　借金苦

こうした不毛の地での凶作の3年間に，移住民は収入がなく，借金が膨れ上がっていった。

4.3.1　掛売り

移住民は，開墾村の店で必要なものを「掛売り」【付け】で買うことができた。支払期限は収穫でお金が入った後だが，凶作で収穫がないため借金が払えず，踏み倒して夜逃げをする家も出てくる。

> 秋祭りが来ても，世直し競馬があっても，原野の人たちの，乏しい財布が一層乏しくなるばかりで，彼等の餓えている銭は一片も，彼等の財布には入って来なかった。いや，彼等の欲しい美しいものや，うまそうなものは原野には入って来るけど，それを買う銭がないのであった。然もこれ等の大道三文商い屋や田舎香具師たちは，小坂商店のように掛けでは何一つ売ってはくれないのだ。だから人々はその抑えきれなくなった欲しいものを小坂商店から掛けで買うより他はなかった。小坂商店は大凶作の年にかえってよい商売にたんまりありつけた。縁日商人たちは，「今年の凶作はよっぽど，こたえたとみえる。何んにも売れん。これでは足代にもならん」と云ってお互いにこぼし合った。（81）

4.3.2　高利貸しの取立て

高利貸しによる「掛け売の代金と貸金の元利金の取立て」は，「雑穀，野菜，馬鈴薯なぞの名ばかりの収穫が済まぬうちに，大凶作の原野に，早くも幾度となく債鬼の群れが入り込んで来て，凩のように荒れまわった」（99）。高利貸しは，虹別原野に「一番広く根を張っている」地元の小坂商店だけでなく，「この原野を遠くとりまく，釧路，標茶，弟子屈，標津なぞの大小の商店，高利貸たち」である。「大凶作と烙印を捺されてしまっては，取り立てもはかばかしくないが，併し一文でも多く早く自分の手に納めよう」と，「われ先にと，回収に努めた」（99）。

小坂商店は，後に刊行される「第一部　根」では，恵比寿の仮面をかぶった鬼として描かれている。

> 市街地では五軒の店屋の内で，馬耕屋上りの小坂商店主が一番，鷹揚に移民たちの依頼に，にこにこと大きく肯いていた。彼の背後の黒幕には，新開墾地移民相手の高利貸，大地主である釧路市の沼内が匿れていた。移民たちは規定通りに開墾を完了し，十町歩の土地が移民たちに無償下附される時までには，移民たちは小坂自身の貸金により，或いは小坂の手を通じて沼内の貸金によって，がんじがらみに身動きが出来ぬようにされ，

土地は右から左へと債鬼たちの手に陥ちてゆく運命にあった（根303）。

その上，虹別原野には，周囲の地域の「小金貸から，路辺りの中処の金貸までが」立ちまわって来た（75）。

4.3.3　債鬼への恐れと開き直り

大凶作と決まって，高利貸たちの取立ては例年にも増して厳しさをます。大崎を始め，「原野の人たちは鼻血までも啜られる気持ちで，日夜おどおどとして，一日も早く冬になって，雪がうんと降り積もり，鉄道線路の除雪なり，砂利採りなりに餓死しないだけの仕事を与えられることを待ちぼうけていた」（99）。

移民は，高利貸しを恐れると同時に，出来る限りの抵抗を試みる。

> 北海道至ところで大凶作の声が喧しくなって来たので，原野の人たちには，やぶれかぶれに，どうにかなるという気持ちがひろがって来た。
> 「なあに，まかり間違ったら，原野のものみんなが原野に枕ならべて餓え死にすればいいのよ。誰からの区別なく，みんなが一緒に餓え死にするんだから不服もあるまえ。どうだ，そうでないか。」なぞと，へらず口をたたく年寄もあった。（75）

債鬼と対等に渡り合って，困らせる者もいる。

> 【原野の人】「払わないと云うんではないけど，今年のような大凶作にも，無理やりに取ろうと云う気持ちが憎ったらしい。」
> 【高利貸し】「そんなこと云ったって無理だ。お前さんたち払わなくても，おら達は待ったなしにどしどし税金を取られるんだよ。そこを考えてくれなくては困るではないか」（75）。

借金取たちはなかなか金の回収ができない。「開墾小屋から開墾小屋へと，訪ね廻る」高利貸しは，どの家でも「おら，もう，我慢が出来んから，期日に約束通り払って貰わんと，今度こそは訴えて出るから，そう思ってけれよ。」と「いまいましそうに捨科白を吐」くしかない（99）。ちなみに，この沼内の言葉で初めて，大崎や津田爺やその他の人々の出身地や郷里での生活状況が明かされている。

> この原野には全く一人として，碌な百姓がいない。さすがに東北の貧乏村から，選り選って水呑み百姓ばかり連れて来たんで，土地を拓くことも知らんのだ。」と悪口をいい，挙句は「この原野のものには，もう融通せんことにする。うかうかしていると，元も子もなくしてしまう。貸金の抵当（かた）にこんなに土地もらったって，どうにもならんぞ。わしは，もう新しい金は，この原野さ注ぎ込まんことにきめた。いまいましい野っ原（ぱら）めだ。（75-76）

大崎の高利貸しとの戦いも激しい。「何もかにも諦めて，この困窮に目をつぶり，観念しなければならぬと感じている様子」で大崎は，「最初は散々あたりちらし，悪態をつい」ている「債鬼【沼

内】の手の中に屈するだけ屈してしま」う（76）。「債鬼の手の中に屈するだけ屈してしまう」とは，具体的にはどういうことかは，この場面では推測できないが，後日，釧路警察で取り調べ中に彼が告白したいと思ったこととして，「入地以来毎年打ち続いた凶作のために飢餓と借金とでうちのめされて，移住民として分配された土地を失い，最後の望みとして，虹別を逃げし【ママ】，鶴の棲んでいるといわれる釧路原野の新しい土地に盗み作りの危険を冒して入地はしてみたものの＜後略＞」（233）と書かれている，下線部がそれではないかと推測される。

大崎は債鬼に屈したように見えるが，しかし，その後で「何か堅い覚悟でもありそうな緊張した顔で，きっぱり言って退けた」開き直りには迫力がある。

> この大凶作はあんたのぼんくら眼（まなこ）にも見えてわかっているべよ。払われないものは，逆さになったって払われないでないか。それでも取ろうというなら，おらたちはあんたの手で首を絞殺されると，おんなじだ，それもよかべえ。だが，よく覚えておくがいいぞ。そうなったら一家八人でお前のとこ怨み殺してやるからな。約束の期日はまだ来ないんだから，それまでによく考えて置けばいい。お前一人の命とおらたち一家八人の命のやりとりでは，おらたちの方，うんと損だども，お前のとこにだって，いらない命はまだあるべえからな。（76）

沼内は，「大崎の眼のすわった，逞しい面構と，荒々しい言葉に気負けし，こんな獣みたいなものを相手に喧嘩しても損だと考えたが，わざと平気を装い」ながら，「約束の期日に，又，お目にかかろう。一家八人首をくくるのも，おれの知ったことではないが，金の方さえ，拵えてくれれば，十把一とからげの安い首をくくらずとも埒があくのさ」と云い残して戻っていった（76）。

4.4　冬期の出稼ぎ

4.4.1　出稼ぎ

原野の人々にとっての稼ぎ場所として，大雪が降ると，鉄道線路の除雪仕事がある（100）。

その他に，男たちは冬期には遠方まで出稼ぎに行く。「釧路炭田，オホーツク海や根室水道や，襟裳岬や千島方面の冬漁へ，或る者は既に雪につつまれた山間の冬期材木伐り出しに」行った（同上）。出稼ぎ先では，「方々から集まった冬の間だけの仲間と，むだ口を叩きながら仕事をしたり，飲んだり，時には喧嘩をしたり，女にありついたりするその日，その日の生活が困窮と飢餓とに対して何の屈託もない全くの息抜きのように思われるのだった」（同上）。

残されたのは，「余程の老人」と，女，子供たちであった（同上）。女たちは，「男たちはみんな出稼ぎに出ればいい。爺さんなんか残らなければいい。そうすれば誰にも怒られなくて寝ていられる」とぬくぬくとした寝暮しを考える（同上）。

大崎は，「天塩や十勝の山奥の冬期伐材の勇ましい生業」という「飯場の出稼人夫」も幾度かしている（145）。

4.4.2　役所の凶作救済策

凶作で収穫がないため，生き延びるためには，出稼ぎや，役所や村が実施する，砂取りなどの「出面」で稼ぐか，高利貸しから土地を担保に借金をするが，借金が嵩み土地を手放し，小作に転落したり，逃亡する者が続出する。『処女地』の主人公もその一人である。

【標茶旧市街地の宿の亭主】農家の話で景気のよい話はあり得なかった。併し，彼等はその滓ばかりになってしまったような味のない話を厭かずに繰り返した。亭主の話ではその村でも急いで救済を要する農家が続々と出てくるので，畑の仕事の一段落つくと同時に河砂利の採取をさせて急場を救うことにするように村会で決まったのであるが，そのために支出される経費では一と月も，もつかどうかがあやぶまれているということであった。
「なるべく沢山，山や漁場さ出稼ぎに行って貰わんと，結局，みんなが食えなくなるってことで，みんな騒いでいるんで，困ったもんだで。」(18)

帰りにまた同じ宿に泊まった大崎は，役人達が大凶作に対して事前に救済方法を立てるために，大勢で視察に来ていると聞き，「去年の砂利取は不公平だった」と不満をのぞかせる（53)。

凶作が続く中，移住者は，騙されたと吐息をつく一方で，村会に対して凶作救済土木事業の実施を要求しようとしていた。

部落の若い者たちが原野中での老精農で村役場や村会議員や世話所に対して評判のよい津田爺さんと横尾爺さんとを表面に押し立て，凶作救済土木事業として，砂利採りと拓殖道路普請の仕事をものにしようと原野の人々を駆り立てて騒いでいる間に，大崎の考はいつの間にか，向うの土地へ移り入り込むことと，その為の用意とに集中されていた。(68)

4.5　大崎一家の日常生活

冬場の出稼ぎ期以外には，凶作に借金という苦しい状況での日常生活は，どのようなものであったのか。

4.5.1　住居

虹別原野に入地した時には，「上等な開墾移民小屋」が待っていた（132–133)。「節穴だらけの薄い板で叩き上げられた安小屋ではあるが，屋根を柾で葺き，小さい窓硝子のついた」ものであった。大崎が「新しい土地」に立てた家は，「おがみ小屋」と呼ばれる隙間風が容易に入り込んで来るような，簡素なもので，厩も同じ屋根の下にある（131–132)。積雪に強い，白樺の立木を利用した掘立の拝み小屋は，家族の協力で瞬く間に出来上がる（同上)。大崎は，その後も，どんどん住みやすく改良を加えていく。照明にはランプを使っている（134)。

4.5.2　家財道具・衣類・夜具

大崎が夜逃げの荷物として馬車に積み込んだのは，食料，種子類の他に，「農具と小屋建て道具，材料，夜具，布団，着物類，勝手道具，仏壇，【父親の】お骨，所有地標」と「最後に思い出した」馬橇である（101)。その他に，時計，持っていくのを忘れた暦がある。馬橇は，夜逃げの途中で曠野に捨て置き後で取りに行くつもりがそのままになってしまった。小さい鉄砲風呂は馬車に積み切れず，虹別から持参できなかった（139)。

衣類についての記述は多くない。娘が溺れたとき，大崎が自分の着物を娘に着せるために脱ぐと，その下は「継ぎだらけの，垢にまみれた，メリヤスシャツ一枚」だった（168)。葬式には，娘に「一番上等の，併しかなりつぎの当った白地の肌襦袢を着せた」(171)。妻が死んだときには，「洗いざらしの単衣物を着せた」(183)。

「二度目の逃亡」で大崎が売り払おうとした衣類は，「今時，農家だって，こんなの【襤褸】金

銭出して買う人はありません。デパートへ行けばきれいで安いのが，うんとぶら下がっていますからね」と言われた代物である（209）。一緒に売ろうとした八人分の夜具布団も大風呂敷二つに包めるほどで（210），その薄さから日常生活の貧しさが推測できる。

4.5.3　食

食事は貧しい。大崎家の「暗い洋燈」の下で，啜るのは，「莢豆の粥」である（12）。「青黄色い皆の顔は垢の為に底光りしていた。」（同上）晩飯は量が充分でないため，育ち盛りで食べたりない子供たちには，種芋として取ってあった小さな馬鈴薯が一人一つ当て，与えられるが，その大きさを巡って喧嘩が起きる（同上）。

大崎が家で酒を飲んでいる形跡はない。ただし，父親の葬式では，寒いので手伝いに来てくれた人には振舞い酒が出ている（82）。

夜逃げの当日，「晩御飯の他に翌日一日分の飯をたいて櫃の中に入れ，更に布団に包ませた。鱒の塩引きを焼いたのと漬物を鉢に入れて，すぐ取り出せるように」用意した（102）。夕飯は，「鰯の干ぼしと馬鈴薯との煮ころがし，干わかめの味噌汁，温いご飯。これは誰にも御馳走であった」（同上）。

道中で食べたのは，「冷い握り飯と，焼け焦げた脂臭い身欠き鰊」（120），朝と昼は「ぼろぼろに冷えた握り飯」（125），「川水を鍋にくんで，飯をたき，それに干した菜っ葉と味噌を入れた雑炊」（127）である。「新しい土地」に着き，家族で建てた「おがみ小屋」での最初の夕餉は，酒が付き，大崎を驚かせる。

> 榾火の下から一つまま焼いた馬鈴薯が掘り出された。身欠鰊が脂の青い火をあげながら榾火の上で焼かれた。それをお捨ては指で裂きちぎって，大きい更に馬鈴薯と一緒に入れ，醤油を少しかけた。それから母親のお種は，小さい銚子を一本，大崎の前へつけた。（134）

年の暮れは，黒砂糖を使った鶉豆の「煮豆と赤井塩鱒と菜っ葉の雑炊で送り」，元旦を迎える（153）。1月5日には，大崎は兎をとってきて「正月のおお御馳走がやって来た」と妻に「見せびらか」す（同上）。「ほんのちょっぴりの黒砂糖と醤油とが入れられ」た鍋から，厩にいる愛馬の北星も地面を蹴るほど「うまそうな匂いがむんむんするほど小屋にこも」った（154）。

4.5.4　開拓村の息抜き

凶作ではあったが，開拓村の唯一と言ってよい娯楽[18]である馬頭観音の秋祭りには，例年どおりに競馬を行うことになった（80）。大凶作で，「原野の人たちの気持ちが荒れすさんでは，何かにつけて，うるさい事が持ち上がって来る」のを避けるため，移民世話所の秋田さん，生方牧場の管理人赤井さん，原野の人々に多額のお金を貸している小坂商店主などにとっては，「多少は原野の人達の機嫌をとって置くのも損ではない」ということになったからだ（82）。「世直し競馬」である。標茶から仕出し弁当が取り寄せる折詰は，「一個二十五銭に見積もらせて，百七，八十ケ」の費用は，「赤井さん，秋田さん，小坂商店主，その他の市街地の小店屋たち，駅逓所，校長さんなぞからの幾らかの寄付でまかな」い，「競馬場で昼食を出す」計画である（同上）。馬頭観音の秋祭りには，村の外から商人たちもやってくる。

> 一軒に一つ宛，折詰が渡された。彼等はお互に充分に顔を知り合っているので，二重取りは到底出来なかったが，しかし，前以て念のために，一軒に一枚ずつの引換券が配ら

> れていた。どこの家も一家総出で，握り飯を噛[ママ]りながら，折詰の料理をつつき合った。そうして，いつの間にか，其処此処に安酒や焼酎の酌み代[ママ]わされているのが見えた。その有様だけ見たならば人は彼等が豊作の秋祭りに集まり祝っているように思うかも[ママ]しれないが，ほんとうにそういう苦しい，高い酒を飲みでもしなければ，散ずることが出来ない重苦しいもので胸がつかえているからなのであった。(84)

「秋祭と世直し競馬は原野の人たちに飲み，食い，又賭ける放楽[ママ]【法楽】の一日をほしいままにさせて煙のように消えて行った」(85)。

4.5.5　病気・医療

病気は，「医者のいない土地であり，どうにも致し方なく，なりゆきに委せるより致し方がなかった」(97)。祖母の視力が落ちたときには，「寒烏の生き目がよく効く」という同郷の津田老人の勧めで呑ませてみるが，喉に閊えてしまう（98)。家族は，「祖母のゆがみ，もだえ，油汗の流れる黒い顔をみつめて，うろたえるばかりであった」(同上)。

早川は，農民には病人が多いという指摘をしている。これは早川の地主という家業上の知識によるものと推測される。

> 暁から黄昏まで新鮮な空気を吸い，万物を生育する大地に足を着けている生活にも拘わらず，農民の間には実に病人が多いと言わねばならぬ。病気の中でも，特に多いように思われるのは，胃腸病，肺病，眼病，皮膚病であり，特に驚かされるのは子供の発育障害と年齢性別を問わぬ精神病のようである。(178)

大崎は，娘が小沼で溺れたときも，「土の上へ膝をつき，お常の泥臭い身体を着物ごと，もみ揺すぶった」だけで，救急処置を知らなかった（167)。

4.5.6　学校教育

長編小説＜土と人＞では，学校は村の中心的な場の一つとして描かれている。虹別村の歴史を書いて出征したのは，小学校の若き教員だった（早川，1944)。『処女地』では学校での教育の場面は描かれていないが，秋祭りには校長【教員】も寄付した人として登場している（82)。

しかし，「新しい土地」には学校はない。夜逃げをする日の朝，初めて子供達に出かけることを告げると，長男と長女が「おらたち学校はどうしたらいいのか，と突然たずねた。大崎とお捨は痛いところを突かれたというように，目を見張って顔を見合わせた。」大崎は「家に用事っこあるから休め」と「ようやくこともなげに言う」が，長男は「あしたはどうするのか」と追及する（101)。「あしたも，あさっても休んでもいい。こんどほかの学校さ上げてやるからな。うんと，でっかい学校だぞ」と誤魔化す（102)。子供達は，それで黙ってしまうが，結局，新しい土地では，親も字が読めないから家でも習えない。子供達の学ぶ権利も守られていない。

5. 釧路原野の「おらの土地」での悲劇

5.1　夜逃げ

大崎が開墾地を捨てる覚悟をして，家族を説得して，夜逃げを実行するまでに3カ月ほどかかっている（**表1**)。

表1　夜逃げの決心から実行まで

（括弧内の数字は引用ページ）

①	導入部：逃亡の決意までの経緯（6-12）	昭和7年	昭和4年に入殖後、あしかけ4年の凶作続き。
②	土地探しの四泊五日の野宿の旅（12-62）	8月お盆過ぎ	標茶旧市街地の商人宿に宿泊。 野宿4泊。「おらの土地」の発見。 塘路駅から標茶駅まで汽車33銭。 標茶旧市街地の商人宿に1泊。 虹別に帰宅バスに視察の役人が同乗。
③	夜逃げへの家族の説得（62-101）	秋口	鶴の棲む土地と言っても家族は反対。 債鬼の厳しい取り立てと家族の同意。 馬頭観音の秋祭りでの折詰の配布。 チフスに罹患した父親の急死と葬式。 「父親の智慧で行きがけの駄賃」として無尽講のお金を落として40円ほど入手。 祖母の極度の視力減退。
④	夜逃げの実行　（101-129）	11月20日夜	三日二晩の逃避行。
⑤	新しい土地での盗み作り（129-197）	ー昭和8年晩秋	冬越し、末娘の溺死、播種、凶作、家族の相次ぐ死。

5.2　自然の脅威と悲劇の連鎖

5.2.1　「新しい土地」での「盗み作り」

大崎は，開墾地から「新しい土地」に向かう途中の釧路原野での野宿で，「借金と餓え死にとの心配さえなくなれば，百姓の暮しは安楽で好ましいものに相違なかった。然も，そういう暮しが，今，始まりかかったのだと思うと」「のびのびとした気持ちで」の蘆の寝床で眠った（120）。

しかし，虹別開墾地からの逃亡先の「おらの土地」は，鶴の棲む泥炭地であり，虹別開墾村と同じように不毛の地であり，自然の脅威にさらされ「盗み作り」の生活はうまく行かなかった。大崎は，「どんなに悪い土地だって，借金取りよりいいにきまっている。うんと，がんばって開墾せば，土地はおらたちを見殺しにするわけはない」と信じていたが，「彼は債鬼以上に，自然の仮借なき吝嗇というものが厳存することをしらなかった」（188）。

虹別では，開墾は「団体移住のこととで共同でプラウを以て馬耕することも出来たし，金銭さえ出せば，あとは種子を蒔くばかりに整地まで請け負うものもいた」が，此処では「否応なしに自分の手と，鍬とで荒土を掘り返さなければならない」ので，ひどく力のいる仕事であった。それでも，立木を伐り倒し芦原を焼いて五反歩ばかりの土地を拓いた（177）。

「彼は大体の整地をして，先ず今年の冬から来春までの餓えぬだけの用意に，手っ取り早く小麦と裸麦とを蒔いた。」（同上）「種子用の蓄えは，これでぎりぎりで」「食糧の欠乏で，いつの間にか，種子用の貯えに手がついていたが，既に背に火のついたような飢餓を押さえることはできず」，大崎が「この上にも食べ料を減らしても，作付けを多くしたいと言うのに対して」，母と妻は「これ以上食を減らすことは出来ない」「もし今年の作が悪かったら，それこそ一家餓え死にしなければならない」と反対した（同上）。大崎の「もし食糧の欠乏がこれ以上ひどくなったら，有り金で食糧を買い入れるのも止むを得ない」という，いわば最後の切り札にも，賛成しなかった（同上）。

女たちは，今年はこの新土（あらつち）の性分を見定めるためにも蒔き付けは，この位でやめて置いて，安くともいつでも金銭になる木炭と薪を出す仕事や，火入れや，荒転（あらおこし）をして，来年の仕事の程度にして置く方が，暮し向きの心配がなくて安心だと，驚くほど熱心に，執拗に，がんばるのであった。（同上）

そこは，美しい鶴の棲む泥炭地で，人間の農耕生活にはまったく不向きな地であった。そして，自然の脅威に負け，蒔き直す種もなく，虹別で味わったと同様の凶作に収穫どころか家族が食い繋ぐだけの食料も危うい状態になる。祖母は，「土地の生産性を支配する見えぬ神の力に豊饒をひそかに祈る様子であった」（178）。「百姓を喰い殺す湿地まなこばかし」で，「おれたちは，みんなこの土地に喰い殺される運にきまったのだのう」と予言する（188）。

5.2.2　悲劇の連鎖

夜逃げの直前の父の急死に始まり，移り住んだ釧路原野では，悲劇は起こるべくして次々と起きる。僅か一年余りのうちに家族を四人も失い，残された子供達にも心身に異常が生じている。

悲劇1　チフスの流行と父親の急死と葬式。
悲劇2　春の出水による末娘の溺死。
悲劇3　娘の死が原因での妻の鬱病発症と縊死。
悲劇4　母・祖母の白内障の悪化，母の縊死，それに伴う労働力不足。
悲劇5　祖母の呆けと死。
悲劇6　二人の子供の栄養失調による発育不全と知恵後れ。
悲劇7　宿で全財産を「掠めとられる」【方外に安く買い叩かれる】。
悲劇8　子供との別れ【子捨て】。
悲劇9　木賃宿で泥酔していて全財産の盗難。
悲劇10　放火強盗の容疑で警察に連行。
悲劇11　鉄道飛び込み自殺失敗，右脚切除。
悲劇12　サムライ部落で紹介されたバタヤ稼業も乞食稼業もできず稼ぎなし。

5.2.3　日々の生活

「新しい土地」に着いた初冬には，虹別でできた「不出来でちょっぴり」の野菜などの収穫物の他に，「とっときの御馳走」としては，「僅かばかりの屑米と，味噌と，醤油，塩があるほかに，身欠鰊，塩鱒，干鱈が少しずつ」あったが，「一家みんなで腹いっぱいになるほど食べられはしない」量であった（140）。それでも木炭を焼く窯が出来上がったとき，「夜は馬鈴薯を大根下しでおろして団子にし，茹でたのが，窯の出来上がりの心祝いとして，みんなの口へ振舞われた」（144）。しかし，食料はどんどん無くなっていき，栄養障害が家族に様々な形で表れる。

風呂もない不衛生な生活である。溺死した末娘の遺骸を「アカまみれた布団」に寝かせ（170），「曾祖母，祖母，母親にあたる三人の女たちが，おうおうと泣きながら，どろどろした汚い着物に，髪も乱れ，垢じみた顔をして」，「青ぶくれの小さい遺骸を古手拭いで拭う」と，「遺骸の肌から青黒い垢が，ぽろぽろとよれて落ちて来た」（171）。「蜜柑箱の半分にも満たな」い，お常のお骨の前には，南瓜雑炊が供えられ，皆も「空腹を僅かに医（ママ）やした」（173）。

5.2.4　医療・医薬品・病気

虹別村でも新しい土地でも「医者は他の世界のものであった」（60）。大崎家の末娘が事故死し

た後，母親【大崎の妻】のお捨は，心の病に蝕まれ，「子供を奪い掠うものが襲うて来るとわめき出すに至って，どうにも手のつけようがなくなる」(180)。早川も「特に驚かされるのは子供の発育障害と年齢性別を問わぬ精神病」が多く見られると前述のように指摘している（178)。

> 遂にはお捨を小屋の柱に縛りつけて置かねばならなくなった。…＜中略＞…お捨が暴れ出すと，縛られた柱ごと，小屋を揺り倒さんばかりであった。大崎は心配のあまり，或る時には，野良仕事の畑へつれて行って，傍の大木へ，犬を繋ぐように繋いで見張りをしながら働くこともあった。お捨は髪をふり乱し，着物をはだけて泣きさわぎ，ひいひい喘ぎながら遂には地上や，叢の中に眠って終うのであった。そういう時，大崎は幾度となく狂った妻の野獣のような寝姿を脚下へ見据えて，暗い心で自分の両手をそっと見くらべ，その，やり場に困ったことであったろう。彼は土と垢とにまみれた妻が，どうかして，このまま目をさまさずに死んで行ってくれぬものかと，熱い，ぬれた目で，横たわったお捨の身体を見守るのであった。(179–180)

病気の中でも心の病は特に手がつけられない。妻と母を縊死で失い，労働力も失い，白内障に認知症の老母の失禁と呆け，幼い子供を抱え，生活にも開墾にも大崎は行き詰まる。

5.3　二度目の土地捨て

10月，「馬鈴薯も大豆も小豆も蕎麦も唐黍も南瓜も秋大根も碌なものは何一つとしてできなかった」(196)。大崎は，みじめな収穫を前に「この土地に来て，僅か一年たつかたたぬ内に一家七人のうち四人までがつぎつぎに死んで行った」ことを思い浮かべ，この「新しい土地」は，「作物や種子のみならず，大崎一家の命さえ受け入れようとしない土地なのかもしれない」と言いようのない不安を感じる（同上)。

大崎は，残った二人の子が「発育盛りの年齢に栄養欠乏が続いた」ため，息子は知能に，娘は背骨に発育障害を起こしていることに気付き，「全身の気力が抜け落ちる思いがし」て，「ああ，おら，もう駄目だ」と胸の中で絶叫する（197)。「この絶望の悲嘆は，子供に対する恐ろしい盲目的な情愛だけを極度に強くさせ」，大崎は自分と一緒にいると餓え死すると考え，小樽に子供を捨てる決意を固める（同上)。

死の曠野から釧路に逃れるための「二度目の逃亡」の用意として，「少しでも金銭になりそうな道具や品物は，一切合切持って行って，金銭に換えたかった」が，子供たちと同じように愛馬も「この一年の間に運動と塩との欠乏のため骨軟症【骨軟化症, osteomalacia】にかかって痩せ衰えて」いたため，持って行けるのは「貧しい家財道具の中，郷里から持って来た幾つかの位牌と夜具布団と着類と，僅かばかりの収穫物」だけで，「一番，金銭になる」木炭や炭は，重いので全部置いて行かなければならなかった。

大崎は，いつかスキーに来ていて迷い込んできた札幌の学生に，今いるところが「釧路原野のチルワツナイ附近」の「クチョロプトあたり」であること，釧路までは地図上では南に三里半ほどしか離れてないことを教えてもらっていた（158–159)。大崎は，五反歩の焼畑[19]と，家族四人の墓と，「大崎常造所有」と墨で書かれた杙標を残して（199)，いつか山の上から望遠鏡で覗いた工場の煙が立つ釧路の町（161）を目指す。

6. 世界大恐慌下の釧路の町での低所得階層の生活

6.1 釧路での最初の五日間

大崎は，釧路近郊で泊まった宿で全財産を僅か23円50銭で「一切のものを売り払ったというよりは，一切のものを掠め奪われてしまっ」た(211)。そして，寒風吹きすさぶ不況の町で，大崎は，町に到着後わずか五日の中に，無一文になってしまう（**表2**）。

6.1.1 商人宿で

最初に泊まった「若狭屋」は（207），大崎が「街道で空車を引かせて来る戻り道の百姓に」教

表２　大崎常造の釧路での転落の軌跡

（括弧内の数字は引用ページ）

	見出し項目		釧路での出来事
①	二度目の土地捨ての決意（197-198）	10 月	乏しい収穫に絶望し、子供を生かすために、小樽行の汽車に乗せて捨てるという「恐ろしい決心」をし、土地を去る準備をする。
②	釧路への出立（199）	1 日目	五反歩の焼畑と、家族 4 人の墓と、「大崎常造所有」と墨で書かれた杙標を残して、骨軟化症の馬が運べるだけの僅かな収穫物、夜具布団、着物類ものしか持てない。 金銭になる木炭や薪は捨てて行く。【この時点で所持金は不詳*】
③	釧路近くの街道沿いの商人宿で（204-211）	1 泊目	馬と馬車を含め、全財産を金銭に換えようとして、僅か 23 円 50 銭で「掠めとられる。」大人 1 人、子供 2 人の 1 泊 3 円 50 銭。【この時点での残金も不詳】
④	釧路駅での子別れ（212-214）	2 日目	子供と釧路の町を歩き廻って過ごす。懐中には 8、90 円。【23 円 50 銭を含む】 昼に親子で赤い魚の寿司をたらふく食べ満足する。「2 円幾ら。」 街を流れる甘い女性の歌声に欲情を感じる。 夜、駅でかけ蕎麦を食べる。【金額不詳】 夜 7 時発の小樽行きの汽車に子供 2 人だけを乗せ、切符（子供 2 枚 4 円 95 銭）と 7 円入った小銭入れと弁当を持たせて座席に座らせた。【弁当代・入場料不詳】 大崎は汽車が出るまで待たずに後ろも見ずに込み合ったプラットフォームを街に出て行く。
⑤	誘惑の夜の街（215-216）	2 泊目	屋台店で焼き鳥と酒を飲む。【金額不詳】 女将が「一晩五円で綺麗な若い女」を世話するというのを断り、安宿へ向う。 暗い夜道の途中で老女に袖を引かれ、朝食付きで 3 円で丸髷の女性を紹介すると言われ、路次の奥の家に連れて行かれ、しこたま飲む。
⑥	仕事探し（216-218）	3 日目	翌朝 15 円請求される。 仕事探しに町を巡る。しかし、「農家が悪いときには、漁の方も悪い」。
⑦	木賃宿（219-221）	3 泊目	木賃宿で晩御飯 10 銭を食べ、朝食付き 30 銭で泊まる。 同宿の男に煙草を 2 本を「騙り奪われる」。
	職安へ（222-223）	4 日目	早朝職業安定所へ行くが仕事はない。 職安で仕事を貰えた者が貰えなかった者に、「切符」を売っているのを見て、高利貸しのようだと思う。

	牛　乳　泥　棒 （223-224） 周旋屋（224）		軒先に配達されている「牛乳壜をかっされって行く労働者」を目撃し、牛乳泥棒に間違えられないかおびえる。 魚市場の近くの蕎麦屋で焼うどんを食べる。【金額不詳】 周旋屋で「千島行き人夫頼む」という看板を見る。
	ヤケ酒（224） 泥酔（224-225）	4泊目	前の晩に行った焼き鳥屋で酒を飲み酔っぱらって宿に帰る。【金額不詳】 「あんまり、何処さ行っても、凶作だ、不景気だって言うから、胸糞が悪くなってね」と宿の亭主に言って、よろけながら、泊まり賃30銭を前払いして、寝る。
	盗難（225） 無一文（225-226） 彷徨（226-249）	5日目	翌朝遅く目が覚めると部屋には誰も残っておらず、位牌と全財産が入った風呂敷がない。 宿の亭主に掛け合うが、相手にされず、朝食が済むと追い出される。胸算用では、盗まれた残金は50円**。 無一文になって釧路の町を彷徨する。

* 釧路に出立時の持ち金は，虹別を夜逃げしたとき持っていた所持金から道中に使った宿泊費と飲食代の残金であり，少なくとも無尽を落とした約40円はあったと考えられる。④での所持金80～90円から逆算すると，夜逃げしたときには，約60円の所持金があったと推測される。
** ④で懐にあった8,90円から④⑤での出費約30円と出費額不明分を引くと盗まれた残金は約50円となる。

えてもらった安宿だったから（203），大崎は標茶の旧市街地で泊まったことのある宿屋のように安心して泊まったと考えられる。宿の亭主によって，宿帳には，「釧路国河上郡虹別原野六十九線北十九号，大崎常造，三十六歳」と書かれる（204）。宿賃は，「朝と晩の食事付きで大人一円五十銭，子供一円」であった（205）。

夕食後，大崎は子供と一緒に床屋に行き，「自分と秀造の髪をかって貰い，銭湯に行った」（同上）。久しい間，「熱い湯に入ることは全く夢にも望めないことだったので，身体も魂も，とろけて行くような快感」を味合うが，「既にひどい畸形になっている」「子供たちの様子は大崎の心を暗くした」（同上）。

6.1.2　農家と町の経済の繋がり

宿に戻った後，大崎は「北星や荷馬車や夜具布団や，その他一切のものを売払うために，宿の亭主に相談」する（205）。

亭主は，「挨拶代りに凶作のことから」話し始め，農家と町の経済の繋がりを語る。

> 農家の悪い年はやはり町だって不景気で，宿屋もまるで商売にならない。農家がいいと，奥の開拓部落から畑ものが，どんどん出て来るので，そのために百姓の人たちも，泊まりがけで出て来て金を使っていく」が，「この何年この方ってものは毎年毎年ひどい凶作で開墾部落からは土地を捨てて逃げ出して行く農家が多くてこんなことでは，折角，拓いた土地も草ぼうぼうになってしまうにきまっていますさ。あんたも開墾部落から出てきた人でばないか。（206）

このようなことを「平気な顔で，ずばりと言」い「大崎の顔色を見て，わしは百も承知だと言う様子」の亭主に，大崎は，自分の身の上を全て話してしまい，「最早や宿の泊り客ではなく，口すぎを求める一人の労働者として亭主の好意にすがる人間」になりさがる（同上）。

職を求める大崎に，亭主は釧路の景気は「開墾地よりも，もっと，もっとひどい」と，次のように説明する（同上）。

・馬車屋も港も不景気のために仕事が全くない。
・馬を飼って行くのさえ難儀をしている。二束三文に馬を売り飛ばし，その日その日の糧を辛うじて得られる日雇い人足になっているが，仕事の当るのは若い者でも，幾日に一度と云う割だ。
・附近の炭山でも，まるっきり不景気で，できるだけ鉱夫を減らし，残った鉱夫にも出来るだけ石炭を掘りださせないようにしている。しかし，鉱夫は暮しが立たぬので少しでも多く掘り出そうとするので，会社では稼ぐ日数と時間を減らし，その上，賃金も減らしているが，それでも売れない石炭が山元にも港にも山のように積み重なり，その上に草が生えている。
・だから釧路港には汽船の影も見えない。
・石炭ばかりか，漁業も海産も駄目だ。
・木材も海岸に積み腐らすほど置かれている。
・この市街地の製糸工場もいつ仕事を休むかもしれない。
・雑穀，畑ものも悪い。

6.1.3　釧路商人の商法

亭主は，大崎の口には出さぬ，「結局，何もかも売って金銭（かね）にして，子供は小樽へやり，自分は町をあさり歩いても食いつなぐ工面をしなければならぬ」という「大崎の事情と嚢中とを察した」ように「今時の景気の悪い時ではいくらにもなるまいが，みんな売るより他にしかたがあるまい」，「明朝，適当な買人を見つけてやる」と言う（207）。しかし，亭主の紹介で来た馬の買い手は，「ぶくぶくに太って，変に青黒い顔をした五十歳がらみの男」で，「つぶし」【肉】にもならないが，「大奮発して，馬車ともで15両」[20]と買い叩き，「周旋料は売人の方からにして下さい」と「五円札三枚」を渡す。（同上）

若い古着屋も，夜具布団は「古綿だけの値段」，着類は「失礼ですが襤褸ばかり」，「今時の人は，農家だって，こんなの金銭出して買う人はない」，「デパートへ行けばきれいで安いのが，うんと，ぶら下がっている」と言い，布団代と合わせて十二円を畳の上に並べて出した（209）。この「デパートへ行けば…」の話は，スキーをしていて迷子になって助けを求めて大崎の小屋に来たスキーヤーとともに，大崎にとっては突如湧いて出た別世界のことのようで，『処女地』の中での貧富の格差が，はっきり感じられる部分である。

大崎を喰い物にしたのは宿の亭主も同様であった。大崎が「あの新しい土地が彼の労力に酬いた貧しい報酬のその又一部にしか過ぎない作物」には，「馬鈴薯，蕎麦，大豆，小豆，唐黍，小麦，燕麦，南瓜」などがあったが，亭主はどれも「ほんのちょっぴりで，まあ家でたべるだけ」，「全部で三円」と「独り決めに」にした（210）。大崎は，「馬車の口銭と差引」にすると言われ，恐れを抱き，宿賃大人一人，子供二人の一泊の宿賃「三円五十銭を払い」，「一切のものを売り払ったというよりは，一切のものを掠め奪われてしまって，魔の口を遁れるように街道を急ぎ釧路の町へと向かった」（211）。

6.2　釧路到着

大崎は，釧路に着いて，改めて子どもを小樽に送る決心をし，汽車に乗せるまで一日を町で寿司を食べたり，街を見たり楽しく過ごす。その後，子どもに6円50銭を持たせ，叔母さんが待っている，釧路の町で用事を済ませて後で行くと騙して汽車に乗せ，込み合ったプラットホームで見送りもせずに，町に出ていく。

町に出て焼き鳥屋に入り，酒を飲む。女将に「若い女」を紹介すると言われるが断って，近くの安宿に向かう途中，気が付くと黒い女影がすり寄ってくる。「丸髷で，奥さんと同じですよ。朝まで三円。高いようですが，朝御飯付きですよ。宿に泊まるより，得で面白いですよ」と「ひそひそと，併しねちっこく」彼を誘い，「一緒に歩くと，警察の人がうるさいから，おらの後をついて来てください」と言われ，大崎がついて行くと，「ある路次の奥の家に導かれ，その二階で丸髷の，厚化粧の女にひき合わされ，したたかに酔いつぶされて了った」(216)。

翌朝の迎え酒の後，15円を請求される。大崎は，後で思い返して，「持たないものは，一層持たないように骨までしゃぶられ，貧乏者は一層ひどい貧乏者に落ちるようになるもんだ」と「骨の髄まで泌み徹るほど，しみじみ悔恨の念を深めた」(219)。

気が付くと10時で，一時間も前に子供たちは小樽に着いていることを思う。仕事を探しに町を歩くが，最初に泊まった宿で聞いた不景気な話のままであった。「千島行き人夫，求む」という周旋屋の張り紙広告に，行ったらもう二度と帰っては来られないだろうと身震いする（224)。

6.3　低所得階層の生活

6.3.1　転落の始まり木賃宿

大崎は，河岸の裏通りの木賃宿に行く。

> 戸を開けて入ると，そこは板敷で汚い長い食卓と，長い腰掛が据えられた薄暗い食堂であった。三,四人の黒い，むさくるしい姿の男が，思ひい【ママ】思いに腰を掛け，食卓にしがみつくように，背をまるくした姿勢で晩飯を食べていた。(219)

宿は，前払いで1泊朝食付30銭で，食事は，別料金の10銭である。苦い番茶を飲みながら，「中位の丼に盛り切りの飯に，馬鈴薯と魚の切れ端との煮込み一皿」の夕飯を食べた。出て行く日の朝御飯には「冷えた，ぼろぼろの飯にぬるい味噌汁をかけて，かきこんだ」(226)。

翌朝，大崎が職業安定所に行ったときには，すでに長い行列が出来ていて，仕事は得られない。別の処に仕事探しに行こうとすると，幸運にも仕事が得られた男に「五銭，割増しつけるから，おめえの札，おれに売ってくれろ」，「五銭なら，安すぎる。十銭だせや」という「切符と銭の交換」を目撃する。

魚市場でも仕事がなく，大崎は前の晩に行った焼き鳥屋に行き，酒を飲んで酔っ払って宿に帰って寝る。抱いて寝ていた全財産と位牌の入った風呂敷包みがないのに翌朝気づき，宿の亭主に訴えるが，朝食が済むと追い出される（224)。

一文無しで寒風の吹きすさぶ町での盗み食いをする路上生活の中で，ある屋敷の納屋で眠り込み，強盗と間違えられて警察が呼ばれる。丘の上の警察署で取調べを受ける中，子捨てのことを含めて身の上を聞き質された末，子どもは無事に小樽で保護されているから迎えに行くようにと言われ，5円50銭を持たされて釈放される。

しかし，自分が居れば子供達は食べていけないと思い，汽車の前に身を投げ自殺を図るが，右

脚を失っただけで，病院に担ぎ込まれ，市役所と警察との取り計らいで「行路病人の施療患者」として全治まで手当を受ける。そして，一ヶ月半後に完治したとして，退院させられる（240-241）。事故で血で汚れた着物の代りをもらい，子どもは「小樽の育成院」にいるから引き取りに行くようにと言われ，6円50銭【5円30銭】[21] を返される（242）。

6.3.2　サムライ部落

行くところのない大崎は，「ふとバタヤ【ばた屋，ごみ箱や道路上で紙くず・ぼろ・金物などの廃品を回収して生活するひと。(「大辞泉」)】になって，その仲間に入れて貰おう」と思い，「『世の廃残者』の群れの雑然と巣食うている」，俗に「サムライ部落」と呼ばれている窪地に行く（243）。しかし，仲間入りするには，世話人に挨拶をし，重だった数名に一升酒を御馳走するという儀式がある。家賃は，「一番安いとこで，月に四十銭，下宿なら日に十銭」で前払いである（243）。ここでもお金がないと暮らせない。

最初に会った老婆が大崎を「赤錆の古亜鉛（トタン）と古板切れと筵で囲まれた小屋」に下宿させ，自分の用心棒兼バタヤの相棒としようと考え，いろいろと面倒をみる（244-248）。

> 大崎は自分の身体を死から救い，また苦痛から救ってくれた医者よりも，この老婆に対して非常な感謝の念を深くした。医者は自分を救ってくれはくれたが，つまり自分に一層悲惨な運命を無理押しに押しつけてよこしたようなものであった。併し，この老婆は，このどん底の，一切の救助のない生存のうちに，尚お生きる途を与えてくれるのであったから。その日の昼に，彼は，老婆が芥捨ての穢土の中へ種を蒔いて獲ったのだという，小さい南瓜の，ゆでたのを御馳走になった。彼は本当に生きかえった心地がした。(245)

老婆は，仲間が拾ってきた座布団50銭を45銭に値切り，大崎に60銭で売って義足まがいのものを作ってくれる。しかし，片足では思うように働けず，大崎はバタヤは三日で廃業する（244-248）。次に，老婆は，大崎に白い金巾を着せて乞食に仕立てる。仲間から街角の縄張り代の「座銭」を売ってもらい，世話人と老婆に「口利料」を払って橋の上に座るが（248），不況で道行く人は誰も見向きもせず，稼ぎは「一銭銀貨三つ」だけであった。これは，老婆の家の「下宿代の一日分にもひどく不足」している。財布の在り金はあらい，ざらい五十銭余りしか残っていなかった」(249)。

> 彼は急に気持ちがふらふらとした。彼は横町の一膳飯屋に入って，持ち金を叩いて焼酎を一杯のみ，夢中で飯を食べた。小一時間ほどして，彼は，すっかり暮れた街へ出た。彼は，ただ，のろのろと，さ迷い歩いた。そうして老婆の小屋へは戻らず，狐狸に憑かれた者のように，雪の中を彷徨しつづけていた。…＜中略＞…彼は木の根のようなものに，躓いて，転んだ。彼は但し，横になったまま身体のとろけるような，何とも言われぬ，よい気持ちで眠りに陥ち込んだ。一夜に一尺も二尺も降り積もる雪が森々として降って来た。(249)

> その年も凶作と飢餓は，荒野を覆う氷雪のように，北海道の農村全部を襲うたのであった。大崎が見捨てて夜逃げした虹別原野も，彼の夢を賭けた新しい舌辛原野も，その例外とはならなかった。死亡，離村，逃亡は相次いで起こり，救援を喉ぎ【ママ】【喘ぎ】求める開墾地や農村の危急に対して，当局も政治家も無力を暴露した。(250)

そして，大崎と思しき行倒れの遺体が，翌年の5月に釧路原野に調査に来た博物学者によって発見される。

7. 結びに：敗者となった開墾移民の物語に潜む社会問題

以上，有島武郎の弟子である早川三代治が資産・所得分布の論文と併行して執筆した，長編小説＜土と人＞の中で，第二次世界大戦中に最初に刊行した第二部『処女地』で描かれた，北海道虹別開墾村の許可移民・大崎常造の没落の過程について検討してきた。

大崎が「敗者」となったのは，自然災害の凶作と不況という社会的な状況に加え，さらに大崎が小学校しか出ておらず，地図も文字も読めないという社会階層出身者であるということも原因の一つであり，この男の転落の人生には，様々な社会問題が潜んでいることが描かれている。

最初に入殖した虹別開墾村では，問題の中心には，耕作農業には向かぬ不毛の火山灰地と気象条件の下での凶作による農業被害とその補償の欠如がある。

そこから派生的に，一生働いても返し切れない借金の返済難という問題が発生する。開墾村では，生活用品，食料，翌年の耕作のための種苗などは村の商店から掛売りで買えるが，凶作で借金が返済できなくなっても金を借りられる公的制度はなく，高利貸しから土地を担保に金を借りるしかない。つまり，借金の返済不能者は，自分のものになる筈だった開墾した土地を，開墾が終わらぬうちに取られ，郷里にいたときと同様の小作に転じるか，夜逃げ昼逃げするしかない。現代版「逃散」である。皮肉にも，借金の抵当に土地を手に入れた高利貸しの方も，その処置に困るという事態も発生している。

開拓村では医者は他の世界のものであった。公衆衛生環境も福祉施設も整っていない。村には，在住の医師や保健婦もいないため，十分な医療が受けられず，また日頃の保健衛生指導も行われていない状況にある。秋祭りで村中に配られた折詰弁当でチブスが蔓延し，死者が多数出た。

大崎の開墾地からの脱走は，子供たちにも影響を及ぼす。大崎が移り住んだ，「盗み作り」の孤独な開墾地には，当然のことながら学校はなく，また親も文盲であるため，子供達は学校教育を受けられない。最初に入殖した地でかろうじて収穫した貧弱な種を使っての泥炭地での耕作は，実を結ばず，日々の食も満足にない。その結果，子供たちには，飢餓による栄養不足で痩せ細り知能の発達への著しい影響が生じる。大人の権利だけでなく子どもの権利もまるで守られていない。幸福を追求する手段もない。

そして，この，大崎が自分を待っていてくれた「おらが土地だ」と信じている鶴の棲む泥炭地では，様々な不幸な出来事が連続して起こる。それらの出来事は起こるべくして起きたとも言える悲劇である。すべては極度の困窮という根から生じた，防ぎ得た悲劇だとも考えられる。末娘の溺死は，大崎に春の大出水という知識がなかったために起きた事故である。妻の鬱病や認知症の母は，心の病であるが，手当を受ける場もなく，働き手の欠如と介護の問題で大崎は妻を絞め殺すことを考えるところまで追いつめられる。

不況の影響も大きい。子供を餓死させることを恐れて開墾地を捨てて向かった釧路の町では，世界恐慌の影響で失業者の群れが溢れていて，職業安定所はあるが，仕事は得られない。貧困の親子を救う福祉制度も，「サムライ部落」で暮す人々に対する救済もない。大崎はバタヤ民たちが住むサムライ部落でバタヤになるが，片足では満足に働けず，二度目の自殺，選択肢のない自殺に追い込まれる。一度目の自殺は子供を餓死から救うために孤児院に入れる方策として，親である自分を消すという自己犠牲的な鉄道投身自殺であった。二度目の自殺は，釧路市役所が「行路

病人の施療患者」として治療し，「一層悲惨な運命を無理押しに押しつけてよこした」【つまり生きながらえさせられた】が，その後の救援がなかった結果でもある。

「これは一体，誰の罪だと，叫びたかった」が叫べず死んでいった低所得階層の人々の代表者としての大崎を見て，早川は「息詰まる程の苦悩と憫憐[ママ]と憤激すら感じる。自然のふところの中に真裸になって抱かれながらも，餓えかつえている農民を目のあたりに見なければならぬからだ。」(60) と書いている。ここには，地主である早川の小作人や弱者への温かい気持ちと，救えない苦しみの葛藤が見える。

この物語は1929年のウォール街大暴落に始まった世界恐慌期の話であるが，それから約80年後の2008年のリーマンショックで，東京の日比谷公園などに失業者やホームレスの人々がテントを張っていた時との類似性が想起させられる。これは，「自殺による死亡者数が高い水準で推移している」ため，2006年に自殺対策基本法（平成十八年法律第八十五号）が制定された後のことであるが，2009年の正月には「年越し派遣村」が臨時に設立され，約500人もの人が集まったと報道され，現代日本の貧困の実態が多くの人々の知るところとなった。これは，氷山の一角にすぎず，その後も自殺，餓死が相次いで起こっており，大きな社会問題となっている。

片足を失った『処女地』の主人公大崎は，身体障害者手帳も給付されず，生活保護もなく，「年越し派遣村」もなく，乞食をしても生きていけない不況の街を後にして冬の釧路原野で野垂れ死にした。大崎の所有地と書かれた杙標の立つ「おらの土地」の家族の眠る墓，を目指したが果たせず途中で倒れたのだろうと，作品の中には書かれてはいない，話の先が推測される。

経済不況下に噴出したこれらの社会問題は，どちらの場合も，一言でいうと，「生存権」「生活権」の問題である。生存権は，現行の日本国憲法第二十五条に「すべての国民は，健康で文化的な最低限の生活を営む権利を有する」とある。この生存権が成り立ち得るためには，職を得る権利や，教育を受ける権利も保障される必要がある。

ところが戦前の大日本帝国憲法には，日本国憲法第十三条や第二十五条のような個人の権利を扱う条項はなかった。早川が『処女地』の中で文学という形で「主人公になりきって【声なき民になり代って】」書いた，開墾民や釧路の町の低所得階層の人々の生活実態は，結局のところ，「生存権」や「幸福追求権」が犯されているということであった。

この「生存権」という考えを，第二次世界大戦後に日本国憲法に第二十五条として盛り込むことに功績があったのは，森戸辰男（1888-1984）であった。奇しくもその，森戸の書いた「クロポトキンの社会思想史の研究」が朝憲紊乱の罪に問われて起きた筆禍事件こそ，早川が，有島の影響で最初の卒業論文の題とした「クロポトキンの農業理論の批判的研究」を，小樽高商教授の大西猪之助の助言で「収穫逓減法則の研究」に変える契機になった原因であった。早川が，小説という形で一早く「生存権」に関わる問題を取り上げることができたのは，経済学者として所得分布の研究，すなわち「不平等」について問題意識を持っていたからではなかろうか。有島武郎が早川の柔らかな十代の心に蒔いた種は，暗い時代にも静かに芽を出し，戦後にも生き延びたと推測される。

謝　辞

本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金による研究（研究代表者金城ふみ子），課題名「明治以降の社会文化と政治機構変動の日本語への影響：分野による表現差の計量解析」（基盤研究C，課題番号：246170150）の研究成果の一部として執筆されたものである。本稿の執筆は小樽商科大学附属図書館での早川文庫の資料調査によるところが大きく，調査に際しては学術情報課の職員

の皆様の温かいご協力を得られたことに感謝する。また，現在早川文庫への追贈を行っている早川佳郎氏から資料についてのご教示や，貴重な資料の閲覧の便宜を図っていただいた。また，成稿に至る過程で，第58回有島武郎研究会で会員として行った，有島武郎の弟子早川三代治に関する報告（金城, 2015b）は，研究会では初めて取り上げられる内容であり，座長の片山礼子氏を始め，会長の中村三春北海道大学教授や山口直孝二松学舎大学教授など皆さまからご質問やご意見をいただいた。また，統計数理研究所共同研究「日本における所得・資産分布の計測史と再集計分析」（代表研究者仙田徹志京都大学准教授，課題番号27-共研-2037）の研究集会でメンバーの一人として2回の報告（金城，2015a，2015c）を行った際には，研究代表の仙田氏を始めほかの参会者からいただいた種々のコメントや，松田芳郎本学及び一橋大学名誉教授のご報告（松田，2015a，2015b）から早川の経済学者としての業績の重要性に関する知見などが得られたが，本稿ではそのすべてを生かしきることはできなかった。今後の論文に生かしたい。ここに記して謝辞に替える。

注

1）最初の結婚相手は，ボン大学に留学中（1921-1924）に知り合い，「欧州で婚約した」女性であったが，1925年，「女性の入国と彼女との結婚をめぐり両親の許しが得られず苦悩する.」（「早川三代治年譜」407ページ，以下，年譜，p. 407などと略記）．1928年春に両親の「反対を押して婚約者と結婚，札幌に新居を構えたが，新妻は環境になじめず，秋帰国させるにいたる」（同上）．その後，商用で出向いていた東京で知り合った山木たけは，婚約中に「高松宮同妃両殿下が1930年4月21日から1931年6月11日までの417日間に渡って全行程7万3900キロのグランド･ハネムーン」に侍女として随行している（平野，2004）．同書には，その旅行中に婚約者の早川三代治との間に交わされた絵葉書も掲載されている．

2）現在は電子化された書籍一覧が小樽商科大学図書館の「早川文庫」としてネット上で閲覧できる（http://www.otaru-uc.ac.jp/htosyo1/siryo/bunko/hayakawa.html）．

3）欧文脈とは，「中田祝夫氏が，漢文訓読によってもたらされた語法・措辞を「漢文直訳語脈」と言われたように，欧文を訓読することによってもたらされた蘭語・英語その他の外国語学習のための訓読の語法・措辞を「欧文の直訳語脈」，略したもの」である（森岡，1999）．

4）戦前は明治大学教授で，東亜研究所に所属し，『宇宙論』などを出している．戦中には第一書房からの出版が多い．同社の文化雑誌『セルパン』にも関わり，大日本文学報告会理事を務め，公職追放になっている．早川も，1941年に「建設的北海道文学」を『新文化』（『セルパン』の改題誌）に書いている．早川は，1932年1月に第一書房から出版された，大島　豊著『宇宙論』函書きに推薦文「『宇宙論』読後感」を，同文を2月に『文芸北海道』第1巻第1号創刊号に書いている．大島は，戦後は「レーニン哲学批判」などを書いている哲学者．主要著書の一部はCiNiiの図書検索にある（http://ci.nii.ac.jp/author/DA01738554）．

5）特に親しい友人ではなかったようであるが，早川は，1940年7月に行われた北海道文話会の伊藤　整歓迎会や，9月の同会講演会に参加している（年譜，p. 471）．「敗戦前後」の中には，1944年7月14日の小樽空襲のあった後日，伊藤　整が，疎開するのだと立ちより，共通の中学校時代の友人である岡田三郎からの伝言を伝える場面が書かれていることからも，親しく言葉を交わす同年代の同郷人だったと言えよう．

6）小樽中学校卒業．岡田三郎は，「大正6年に新聞懸賞小説に応募した『涯（はて）なき路（みち）』が一等当選し，文壇にデビューしました」が，後に自然主義の「徳田秋声の感化を受けて自分の生活に密着した」私小説を書いた小説家である（「第13話　岡田三郎　小説家の運命」（小樽市「広報おたる」平成19年7月号掲載）．岡田の「自分の運命と受け入れた作品『秋・冬』などが，伊藤　整らに深い感銘を与えた」（同上）．「敗戦前後」（未定稿）には，小樽の自宅に訪ねてきた伊藤　整に「日本文学報国会を今頃立ち上げるのは時期既に遅しだ」と岡田への伝言を託したことが書かれている（注5参照）．

7）卒業論文の当初の題は，山木（年譜，p. 455）では，「クロポトキンの農業論批判」となっている．どちらが正しいのかは不明であるが，いずれにしても，「クロポトキン」絡みの研究であることには違い

ない.

8）高田保馬先生顕彰会（http://takadayasuma.jp）.

9）「貸地」がまだ少し残っていた（四男の早川佳郎氏によるご教示）.

10）早川三代治の四男佳郎氏によると，株取引も行っていた（注9と同様，2015年8月7日大手町OAZOのtanto mariでの面談の折にご教示いただいた）．紙不足の戦時中に書かれた原稿用紙は，大きさや紙質など様々で，中には，株取引きに使われたと思われる数字が書かれた裏紙に升目を印刷したようなものも多数ある.

11）早川（1944）『第四部　生ける地』元元書房，の最後の方に，村の学校の若い男の先生が召集を前に，虹別村の歴史を書き残している．この後に，戦後書かれた第五部があるが，当初は四部作として書かれた，長編小説＜土と人＞は村の歴史のまとめで終わっていると推測される（金城，2014参照）.

12）長編小説＜土と人＞は，戦前に第四部まで書かれ出版している．戦後に遺稿として第五部『地飢ゆ』が『北方文芸』第1巻第2号（1968年2月号）から第2巻第4号（1969年4月号）まで15回に分けて連載されたが（小笠原，1968参照），生前には刊行はされなかった．遺族の手によって中央公論事業出版より刊行されたのは2012年である．書評には，松田（2012）などがある.

13）清書原稿の本題は，「冷たい土地」となっているが，原稿を包んだ外側の茶色の包装紙には早川直筆で，「冷たい土　二四四枚（四〇〇字）」と書かれている．同作品の稿了は昭和22年10月25日であるが，清書が完成したのは同11月19日である.

14）1940年以降の情報局による出版統制が行われ，紙不足は深刻化し，用紙の割り当てがなければ出版は自由にはできなかった（協同出版社編，1942参照）．この戦時中の紙不足の状況は，早川の原稿が形や大きさの様々な紙や，裏紙を利用して書かれていることや，それらを整理するために使われた封筒類も再利用のものや，有り合わせの紙を繋いで作っていることからもよく判る．原稿の書かれた裏を返すと，そこには，別の原稿の下書き，多数印刷していたと思われる資料収集のための定型の簡単な挨拶状が書かれていたりする．印刷会社の名前の入った原稿用紙に加え，中には株価と思しき数字がぎっしりと書かれているものや，ページ数を計算したような数字が書かれているものなどがある.

15）戦前は刊行には至らなかった第五部は，亡くなる少し前まで修正していたそうで，その最終稿には昭和37年8月21日完了と記載されている（山木，2012，p. 448）.

16）泥炭は，「90％以上が水分で，踏むとふかふかしていて，水がジュワっとしみ出てくる感じ」で，「ウィスキーを作るためのモルトを薫製するための燃料として有名で」，「酸性度が強く殺菌作用がある」ため，「第二次世界大戦の時はガーゼの変わりに使われた」，「乾燥させれば燃料にもなり，北海道でも戦前までは使われていた」，「現在では，乾燥させて土地改良材としても利用」されているなどと，この美唄市の説明は，泥炭地の利用価値に焦点を当てている．しかし，「美しい鶴の棲む泥炭地は百姓の耕作には向かない」（2.5.1参照）.

17）「五, 六年」は，他の部分の記述から見て「三, 四年」の間違いだと考えられる.

18）葬式に「原野の婆さん達によって作られている御詠歌連の連中が集まって来て，急に賑やかになった」（88）．これも一種の娯楽か．その他女性たちの楽しみについての記述はない.

19）ただし，「入地第一年目の春には，かれこれ一町歩余りの土地が拓かれて，とも角も大崎一家の生活の根が下ろされた」（177–178）という記述もある．畑は半分だったのだろうか.

20）「15両」は「15円」のことであることが，すぐ次の「五円札三枚」や，「北星には可哀そうだけど，十五円で買って貰います」（208）から判る．他にも「両」が「円」の代りに使われている処があり，当時，まだ貨幣単位として「両」が日常語として使われていることがあったと推測される.

21）これは，一文無しの大崎が事故前に強盗で取り調べを受けた際に，警察で恵まれた金5円50銭（239）を返したものであるから誤植である．病院から出たばかりのところで，「懐中には五円五十銭あるので，十日位食べて，寝ることは出来る」（243）とある.

参考文献

有島武郎（1923）「農場開放顛末」（談）『帝国大学新聞』大正12年4月．引用は，（1981）『有島武郎全集第九巻』筑摩書房収録版，pp. 370–373による.

有島武郎（1911）「或る女のグリンプス」『白樺』第2巻第1号（明治44年1月号）から16回（1913年3月まで）の連載．引用は，『有島武郎全集　第二巻』（1980）筑摩書房収録版，pp. 63–218による．

有島武郎（1908）「An Incident」．引用は，『有島武郎全集　第二巻』（1980）筑摩書房収録版，pp. 278–285による．

有島安子（1916）有島武郎編『歌集　まつ虫』（非売品，限定私家本，発行400冊）．

大島　豊（1932）『宇宙論』第一書房．

大西猪之介（1920）『囚われの経済学』寶文館．

小笠原 克（1968）「『地飢ゆ』の連載にあたって」（解説）小笠原 克編集『北方文芸』1968年2月号，札幌，なにわ書房，pp. 140–141.

小樽商科大学百年史編纂室（2011a）「第五高等商業学校関係書類」『小樽商科大学百年史』小樽商科大学, p. 5.

小樽商科大学百年史編纂室（2011b）「高等商業学校敷地として寄付申出者調」『小樽商科大学百年史』小樽商科大学，p. 5.

小樽商工会議所（1995a）「第9章　啄木と多喜二～その3」小樽商工会議所「小樽商人の軌跡」『小樽商工会議所百年史』．引用は，www.otarucci.jp/kiseki/kiseki-09c.htmlによる．

小樽商工会議所（1995b）「北海道移住者の内容」「第10章　米の沼田喜三郎と小豆の高橋直治～その3」「小樽商人の軌跡」『小樽商工会議所百年史』．引用はhttp://www.otarucci.jp/kiseki/kiseki-10c.htmlによる．

片山晴夫・片山礼子（2004）「有島武郎『或る女』と『松蟲』に関する小稿：有島安子の短歌の考察を中心に」『北海道教育大学紀要　人文科学・社会科学編』55（1），pp. I–VI.

片山礼子（2013）『有島武郎小論 付 有島武郎編・安子夫人遺稿集「松むし」（全）』蒼丘書林．

上久保 敏（2003）「異質の経済学者早川三代治～兼ねる経済学者」『日本の経済学を築いた50人：ノン・マルクス経済学の足跡』日本評論社，pp. 86–90.

神谷忠孝（1980）「解説」『北海道文学全集第9巻』立風書房，p. 418.

木戸清平（1960）『知られざる文学―近代文学ノート―』川又書店．

協同出版社編（1932）『書籍年鑑：昭和17年版』協同出版社．引用は，国立国会図書館永年番号ndljp/pid/1122884のスキャンファイルによる．

金城ふみ子（2015a）「早川三代治の『土』・『土地』への関心と悩み」仙田徹志代表統計数理共同研究第2回研究会（2015年12月10日にて開催）口頭発表配布資料，統計数理研究所．

金城ふみ子（2015b）「経済学者，文学者，地主という三つの顔を持つ早川三代治の『土』・『土地』への関心～師の有島武郎の影響および文学作品を中心に」第58回有島武郎研究会（2015年11月21日開催）口頭発表配布資料，二松学舎大学．

金城ふみ子（2015c）「経済学者，文学者，地主という三つの顔を持つ早川三代治の『土』・『土地』への関心」．仙田徹志代表統計数理共同研究第1回研究会（2015年8月4日開催）口頭発表配布資料．東京立川，統計数理研究所．

金城ふみ子（2014）「経済学者早川三代治の長編小説＜土と人＞の執筆意図，構成，出版の経緯――作品分析の背景考察の試み――」『東京国際大学論叢経済学部篇』．東京国際大学，pp. 43–68.

金城ふみ子（2012）「有島武郎の作品における身体表現の用法――初期の短編作品 An Incident――」『日本語日本文学　第三十八輯』輔仁大学日本語文学系，pp. 117–139.

クロポトキン，P.（Peter Kropotkin）著，大杉　栄訳（1920）『一革命家の思い出』春陽堂．（Kropotkin, P.（1901）．*Autour d'une Vie*［ある生涯をめぐって］，Paris：ストック社（フランス語版）．Kropotkin, P.（1899）．*Memoirs of a Revolutionist*. NewYork: Houghton Mifflin.）

クロポトキン，P.（Peter Kropotkin）著，高杉一郎訳（1979）『ある革命家の手記』上/下，岩波文庫，白218–2/，岩波書店．（Kropotkin, P. (1899). *Memoirs of a Revolutionist*. New York: Houghton Mifflin.）

Kropotkin, P. (1899). Memoirs of a revolutionist. Boston; New York: Houghton Mifflin Cambridge: Riverside Press.【小樽商科大学所蔵早川文庫洋書0030491312　LH E.K‖09303‖049131.】

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（2015）「東北農業研究センター水稲冷害早期警戒システム」．引用はhttp://www.reigai.affrc.go.jp/zusetu/reigai/kako/kyorei.pdf.による．

汐見三郎，毛里英於菟，武田長太郎，益田熊雄（1933）『国民所得の分配』（財政金融研究会紀要）有斐閣．本文244p．統計付録54p.

汐見三郎（1932）「国民所得の分配の型を論ず」『経済論叢』第34巻6号，京都帝国大学経済学会，pp. 879–891.
標茶町（2015a）同町ホームページ　http://www.town.shibecha.hokkaido.jp.
標茶町（2015b）「移住相談窓口」 http://www.town.shibecha.hokkaido.jp/gyousei/ijuu_kouryuu/soudanmadoguchi.html.
標茶町(2015c)「標茶移住へのご案内」 http://www.town.shibecha.hokkaido.jp/gyousei/ijuu_kouryuu/files/iturn011_migrant_guide.pdf.
寺崎康博（1986）「戦前期の所得分布の変動：展望」『長崎大学教養部紀要 人文科学篇』26（2），長崎大学，pp. 25–42.
手塚壽郎（1920）『ゴッセン研究』同文館.
トルストイ（Lev Nikolayevich Tolstoy）著，米川正夫訳（1929）「地主の朝」『トルストイ全集　第1巻』岩波書店，pp. 649–741．引用は，出版年1930年版の小樽商科大学附属図書館早川文庫登録番号LHL.T‖06502‖085301による．
日本郵船（1928）『日本郵船営業案内』（原文英語）日本郵船株式会社.
早川　昇（1970）『アイヌの民俗』民俗民芸双書54，岩崎美術社.
早川治男・佳郎（2012a）「主要著作」『地飢ゆ　土と人 第五部』中央公論新社，pp. 459–463.
早川治男・佳郎（2012b）「早川三代治 年譜」『地飢ゆ 土と人 第五部』中央公論新社，pp. 464–477.
美唄市（2015）「泥炭地って」『宮島沼の不思議』美唄市ホームページ　http://www.city.bibai.hokkaido.jp/miyajimanuma/07_fusigi/7_1_04.htm.
平野久美子（2004）『高松宮同妃両殿下のグランドハネムーン』中央公論新社.
松田芳郎（2015a）「［第2次世界大戦前の］税務統計の利用可能性について」仙田徹志代表統計数理共同研究第2回研究会（2015年12月10日開催）口頭発表配布資料，統計数理研究所.
松田芳郎（2015b）「第2次世界大戦前後の所得・資産分布の研究動向のサーベイ」仙田徹志代表統計数理共同研究第1回研究会（2015年8月4日開催）口頭発表配布資料，統計数理研究所.
Matsuda, Yoshiro (2014). A Short Sketch of the History of the Development of Statistical Surveys and Income Distribution. Kamiya Denzo, Yoshiro Matsuda and Mikio Suga (eds.) *Income Distribution in Asian Regions*. pp. 54–61. Tokyo, Japan Stastical Association. 400p.
松田芳郎（2012）「書評：早川三代治『地飢ゆ』」『緑丘112号』小樽商科大学同窓会，pp. 29–31.
松田芳郎（1976）「早川三代治教授と早川文庫」小樽商科大学附属図書館『早川文庫目録』小樽商科大学，pp. xii–xiv.
森戸辰男（1919）「クロポトキンの社会思想の研究」『経済学研究』創刊号，東京大学経済学部．【発禁になった書物であるため，ページ番号未確認．】
森岡健二（1999）『欧文訓読の研究―欧文脈の形成』明治書院.
山木丈生（2012）「刊行に寄せて」早川三代治（2012）『地飢ゆ』中央公論新社，pp. 448–458.

【早川三代治の著作のうち本稿で言及および引用した著作のみの目録】

（以下の情報は，早川佳郎編（2015）「早川三代治著作目録Ver. 4」（ページの記載なし）からの引用のため，筆者所有の資料以外はページ番号の記載はない．）

早川三代治（1914a）（連名執筆）「第五学年旅行記」『小樽中学校校友会雑誌』10号，小樽，小樽中学校校友会.
早川三代治（1914b）「愁の人と自由の鳥」（詞藻欄　五甲早川三代治）『小樽中学校校友会雑誌』10号，小樽中学校校友会.
早川三代治（1914c）「THE CHRYSANTHEMUM」（詞藻欄）『小樽中学校校友会雑誌』10号．小樽中学校校友会.
早川三代治（ペンネーム朝千吉）（1914）「盲目の王子」『北大文武会会報』73号.
早川三代治（ペンネーム朝千吉）（1915）「サタンの目ざめ」『北大文武会会報』74号.
早川三代治（1927）「吹雪の底」（戯曲）（島崎藤村に送った草稿．1932年「新しき縄」と改題）.

早川三代治（1929）「聖女の肉体」（戯曲）『三田文学』第4巻第1号，昭和4年1月号.
早川三代治（1932a）「新しき縄」（戯曲）（旧題（1927）「吹雪の底」）『劇と評論』復活第2号.［1933年末に新劇座で上演.］
早川三代治（1932b）戯曲「入地」. 初出『劇と評論』昭和七年所十一月号所載.『トレ グラチエ 戯曲集』所収，pp. 1–34.
早川三代治（1932c）「出家」『北大文藝』第14冊有島武郎追悼号.
早川三代治（1932d）「我邦耕地の分配状態に就て」『高岡熊雄教授在職35年記念論文集　農政と経済』北大法経会.
早川三代治（1932e）「『宇宙論』読後感」［大島　豊著『宇宙論』函書き推薦文と同文］『文芸北海道』第1巻第1号創刊号，第一書房.
早川三代治（1933）「海から」『ラインのほとり』（随筆集）明窓社.
Hayakawa, Miyoji (1933, Septembre). Sulla Distribuzione dei Terreni Agrari nel Giappone dal 1908 al 1930. *Giornale Degli Economisti*. Anno XLVⅢ, No. 9, Italia, Città di Castello.
早川三代治（1934a）「鶴の棲息地」（第一回）『北大文芸』27号，北大文芸編集部.
早川三代治（1934b）「鶴の棲息地」（第二回）『北大文芸』28号，北大文芸編集部.
早川三代治（1934c）「鶴の棲息地」（第三回）『北大文芸』29号，北大文芸編集部.
早川三代治（1934d）「旭川市に於ける所得分布」『法経会論叢』第3輯，北大法経会.
早川三代治（1935a）「鶴の棲息地」（第四回）『北大文芸』30号，北大文芸編集部.
早川三代治（1935b）「有島先生のこと」（未定稿）.
早川三代治（1935c）「農村に於ける所得分布」『日本社会学会年報　第3輯』（昭和10.5.5同学会第10回研究会報告）日本社会学会.
早川三代治（1935d）「所得の社会的ピラミィドに就いて」『日本統計学会第四年年報』日本統計学会.
早川三代治（1935e）「鶴の棲息地の連載中止に際して」『北大文芸』31号，北大文芸編集部.
早川三代治（1938a）「所得分布の形態に就て」『日本統計学会第四年年報』日本統計学会.
早川三代治（1938b）「ポム神惠の地主」（未刊行）.（1942年刊行の『処女地』の前半部分.）
早川三代治（1941a）「野火」『北大文芸』42号，北大文芸編集部.
早川三代治（1941b）「建設的北海道文学」『新文化』（『セルパン』の改題誌）.
早川三代治（1942）『処女地』元元書房. 引用は，「処女地」『北海道文学全集第9巻』（1960）立風書房，pp. 3–255による.
早川三代治（1944a）『第三部　土から生まれるもの』（土と人），元元書房. 393p.
早川三代治（1944b）『第四部　生ける地』（土と人），寶文館.
早川三代治（1944c）「所得分布に関する諸考察」日本統計学会編『国民所得とその分布』日本評論社.
早川三代治（1945）『第一部　根』（土と人）寶文館. 392p（発行部数1,500部）.
早川三代治（1946）「養ひの土地―小樽」（随筆）『週刊朝日』（北海道版）第49巻第16号.
早川三代治（1947a）『若い地主』青年論壇社，238p.
早川三代治（1947b）「ある時期の謙介」（未定稿）.
早川三代治（1947c）「第五部　地飢ゆ」（土と人）（成稿725p.）初稿は，（1968）『北方文芸』なにわ書房に1968–2から1969–4まで15回に分けて連載. 修正稿の刊行は，早川治男・早川佳郎（共編）（2012）『地飢ゆ 土と人 第五部』中央公論新社，477p.（本書には標題作品の他に下記の文献が収録されている.）
小笠原　克（まさる）「『地飢ゆ』の連載にあたって」（『北方文芸』1968年2月号，札幌，なにわ書房，pp. 140–141の再掲.）
木戸清平「『地飢ゆ』の原稿」（『北方文芸』1970年4月号の再掲）.
山本丈生「刊行に寄せて」pp. 448–458.
［早川治男・早川佳郎］「主要著作」pp. 459–463.
早川治男・早川佳郎「早川三代治　年譜」pp. 464–477.
早川三代治（1947d）「農地解放」（成稿333p.　未刊行）.
早川三代治（1947e）「冷たい土地」（成稿244p.　未刊行）.
早川三代治（1947f）「敗戦前後」（未定稿）.

早川三代治（1947g）「有島武郎と島崎藤村」［同年10月27日に北大予科で行われた講演の記録］.『北海日日新聞』1月1日，第120号.
早川三代治（1948）「作家と生活―島崎藤村と有島武郎―」『文芸復興』第3巻第2・3号.
早川三代治（1953）「有島先生と小樽の『草の葉』の会」『北海タイムス』「小樽文学散歩」10月17日号.
早川三代治（1959）「パレート法則による所得と財産分布に関する研究」（早稲田大学博士学位論文）.
早川三代治（1962）「有島先生」『有島武郎集 月報25』講談社.